

「言語 A：文学」指導の手引き

2021 年第 1 回試験

「言語 A：文学」指導の手引き

2021 年第 1 回試験

ディプロマプログラム (DP)
「言語A: 文学」指導の手引き

2019年5月発行

更新日2019年9

本資料の翻訳・刊行にあたり、文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

発行者 非営利教育財団 国際バカロレア機構 (International Baccalaureate Organization) 15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate
Cardiff, Wales CF23 8GL
United Kingdom
ウェブサイト: ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2019

国際バカロレア機構 (以下、「IB」という。) は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。事前にIBから書面での承諾を得るか、「[Rules for use of IB Intellectual Property](#) (IBの知的財産に関する規則)」において明確に許可されている場合を除いて、形式と手段を問わず、本書のいかなる部分の複製、検索システムへの保存、および送信を禁じます。

IB の商品と刊行物は、[IB Store](#)ストア でお求めください (email : sales@ibo.org)。有償か無償かに関わらず、第三者 (チューターや教員養成の提供者、教育関連の出版社、カリキュラムマップの提供者や運営者、教師用資料のデジタルプラットフォームなど) がIBのエコシステムの中で IB 資料を商用利用するためには、書面による IB からのライセンス発行が必要です。ライセンスの申請は copyright@ibo.org までご連絡ください。より詳細な情報は[IBのウェブサイト](#)を参照してください。

IBの使命

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野を持つ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探求し研究するスキル身に付けます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じて持ち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えにに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語や様々な方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念を持つ人

私たちは、誠実かつ正直に、公平な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々が持つ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とその結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経歴の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多岐な視点を求め、価値を見出し、その経験を糧に成長しようと努力します。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界をよくするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考え方や方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちが生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えおよび経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域や社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。

目次

はじめに	1
本資料の目的	1
ディプロマプログラム (DP) とは	2
「言語 A : 文学」の学習	7
ねらい	17
評価目標	18
評価目標の実践	19
シラバス	21
シラバスの概要	21
シラバスの内容	22
評価	37
DP における評価	37
評価の概要 — SL	40
評価の概要 : SSST の履修生 — SL	41
評価の概要 — HL	42
外部評価	43
内部評価	66
「指導のアプローチ」と「学習のアプローチ」(ATL)	77
「言語と文学」における「指導のアプローチ」と ATL	77
付録	85
指示用語の解説	85
参考文献	87

本資料の目的

本資料は、「言語 A : 文学」を学校で計画、指導、評価するための手引きです。科目担当教師を主な対象としていますが、生徒や保護者に「言語 A」について説明する際にもご活用ください。

本資料は、プログラム・リソース・センターの当該科目のページで入手できます。プログラム・リソース・センター (resources.ibo.org) は、パスワードで保護された IB のウェブサイトで、IB の教師をサポートする情報源です。また、本資料は IB ストア (store.ibo.org) で購入することもできます。

その他のリソース

試験問題 (paper) の見本とマークスキーム (採点基準)、教師用参考資料 (TSM : teacher support material)、科目レポート、評価規準の説明といったその他のリソースも、プログラム・リソース・センターで取り扱っています。過去の試験問題やマークスキームは、IB ストアで購入できます。

プログラム・リソース・センターでは、他の教師が作成・活用している教育リソースについて情報を得ることができますので、ご活用ください。ウェブサイト、書籍、ビデオ、専門誌、指導案など、役に立つリソースを教師が提供することもできます。

謝辞

IB は、本資料を作成するにあたり時間やリソースを惜しみなく提供して下さった教育関係者や提携校の皆様に感謝の意を表します。

2021 年第 1 回試験

ディプロマプログラム (DP) とは

ディプロマプログラム (DP) は、16 歳から 19 歳までの大学入学前の生徒を対象とした、綿密に組まれた教育プログラムです。幅広い分野を学習する 2 年間のプログラムで、知識豊かで探究心に富み、思いやりと共感する心をもつ人間を育成することを目的としています。また、多様な文化の理解と開かれた心の育成に力を入れており、さまざまな視点を尊重してそれを評価するために必要な態度を育むことを目指しています。

DP のプログラムモデル

DP は、中心となる核 (「コア」) を 6 つの教科が取り囲むモデル図で示すことができます (図 1 参照)。DP は、幅広い教科を同時並行的に学ぶことを奨励します。生徒は、「言語と文学」(グループ 1) と「言語の習得」(グループ 2) から現代言語を 2 言語 (または現代言語と古典言語を 1 言語ずつ)、「個人と社会」(グループ 3) から人文または社会科学を 1 科目、「理科」(グループ 4) から 1 科目、「数学」(グループ 5) から 1 科目、そして「芸術」(グループ 6) から 1 科目を履修します。多岐にわたる分野を学習するため、学習量が多く、大学入学に向けて効果的に準備できるようになっています。各教科から柔軟に科目を選択できるため、特に興味のある科目や、大学で専攻したいと考えている分野の科目を選ぶことができます。

図1
DPのプログラムモデル



科目の選択

生徒は、6つの教科からそれぞれ1科目を選択します。ただし、「芸術」から1科目選ぶ代わりに、他の教科で2科目選択することもできます。通常は3科目（最大4科目）を上級レベル（HL：higher level）、その他を標準レベル（SL：standard level）で履修します。IBでは、HL科目の学習に240時間、SL科目の学習に150時間を割りあてることを推奨しています。HL科目はSL科目よりも幅広い内容を深く学習します。

いずれのレベルにおいても、さまざまなスキルを身につけますが、特に批判的思考（クリティカルシンキング）と分析に重点を置いています。各科目の修了時に、IBによる外部評価（EA：external assessment）で生徒の学力を評価します。また、多くの科目で、科目を担当する教師が評価を行う課題（コースワーク）を課しています。

プログラムモデルの「コア」

DPで学ぶすべての生徒は、モデルの「コア」を形づくる3つの要素を履修します。

「知の理論」（TOK：theory of knowledge）は、基本的に批判的思考と知るプロセスの探究についてのコースであり、特定の知識体系を学習するコースではありません。「知識の本質」について考え、私たちが「知っている」と主張することを、いったいどのようにし

て知ることの考察をします。具体的には、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究するよう生徒に働きかけていきます。TOKの目的は、共有された「知識の領域」の間のつながりを重視し、それを「個人的な知識」に結びつけることで、生徒が自分なりのものの見方や他者との違いを自覚できるよう促していくことにあります。

「創造性・活動・奉仕」(CAS: creativity, activity, service)は、DPの中核を成すものです。CASは、「IBの学習者像」を現実的かつ実際的な方法で生徒たちが実践し、個人として成長するとともに、他者との関係における自分の役割を認識する機会を提供します。個人やグループでのさまざまな経験を通じて自分の関心のある分野を探究し、自分の情熱や個性、ものの見方を表現することで、生徒はさまざまなスキル、物事に対する姿勢、そして気質を養っていきます。CASは、要求度の高い学問的なプログラムを全人的(ホリスティック)な観点から補完するものであり、強い意志をもち、協働し、目標を達成し、その喜びを感じる機会をもたらします。

CASは、以下の3つの要素から構成されます。

- ・ 創造性 (creativity) : アイデアを探究し拡張する取り組みを通じて、オリジナルの作品やパフォーマンス、または独自の解釈を表現した作品やパフォーマンスにつなげる
- ・ 活動 (activity) : 健康的なライフスタイルに寄与する身体的な活動を実践する
- ・ 奉仕 (service) : コミュニティーが実際にもつニーズに対応するための、協働的かつ互恵的な取り組みに従事する

「課題論文」(EE: extended essay)では、生徒が関心のあるトピックの個人研究に取り組み、研究成果を4000語(日本語の場合は8000字)の論文にまとめます。これには「ワールドスタディーズ」の「課題論文」として執筆するものも含まれます。履修している6つのDP科目から1科目(世界を対象に学際的な研究を行う「ワールドスタディーズ」の場合は2科目)を選んで対象とする研究分野を定め、大学で必要とされる個人研究におけるリサーチスキルや書く(ライティング)スキルを身につけます。研究成果は正式な書式に構成された論文にまとめ、選択した科目にふさわしい論理的かつ一貫した形式でアイデアや研究結果を表現します。EEは、高度なリサーチスキル、書くスキル、創造性を育み、知的発見を促すことを目的としています。担当教員の指導を受けながら、自分で選んだトピックの個人研究に自立的に取り組む、本格的な学習経験の機会を生徒にもたらします。

「指導のアプローチ」と「学習のアプローチ」(ATL)

DPの「指導のアプローチ」と「学習のアプローチ」(ATL: approaches to learning)は、意図的なストラテジーやスキル、態度として、指導や学習に浸透させるべきものです。「指導のアプローチ」もATLも、「IBの学習者像」に示されている人物像と本質的に関連しています。そして、生徒の学習の質を高めると同時に、DPの最終評価やその先の学びのための礎となります。DPでの「指導のアプローチ」とATLには、次のようなねらいがあります。

- ・ 学習内容を教えるだけでなく、学習者を導く存在としての教師を支援する

- ・ 教師が明確なストラテジーを策定できるよう支援することにより、体系的な探究とより高度な批判的思考や創造的思考に生徒がより有意義に取り組んでいけるような学習経験を創造する
- ・ 各科目のねらい（科目別の目標以上のもの）の達成と、従来は分断されていた知識の関連づけ（同時並行的な学習）の両方を促す
- ・ 生徒が卒業後も積極的に学び続けるために、さまざまなスキルを系統的に身につけるよう奨励する。また、生徒が良い成績を得て大学に進学できるよう支援すると同時に、大学在学中の学業の成就や卒業後の成功に向けて準備する
- ・ 生徒にとって DP の体験が、より一貫性があり、身近な体験となるようにする
- ・ 学校が、理想主義と実践主義の融合した IB の DP 教育の本質を理解できるように促す

5つのATL（思考スキル、社会性スキル、コミュニケーションスキル、自己管理スキル、リサーチスキルの育成）と、6つの「指導のアプローチ」（探究を基盤とする指導、概念に重点を置く指導、文脈化された指導、協働に基づく指導、生徒の多様性に応じて差別化した指導、評価を取り入れた指導）は、IBの教育を支える重要な価値観と原理を反映しています。

「言語A：文学」の「指導のアプローチ」とATLに関する詳細は、本資料の『「言語と文学」の学習における「指導のアプローチ」とATL』のセクションをご覧ください。

「IBの使命」と「IBの学習者像」

DPでは、「IBの使命」と「IBの学習者像」に示されている目的の達成に向かって、生徒が必要な知識やスキル、態度を身につけられるよう働きかけます。DPにおける指導と学習は、IBの教育理念を日々の実践において具現化したものです。

学問的誠実性

DPにおける学問的誠実性 (academic honesty) とは、「IBの学習者像」で説明されている価値観と行動のことです。指導と学習、そして評価において学問的誠実性を貫くことで、個人としての正しい行動が促され、他者とその成果物に対する敬意が生まれ、すべての生徒が学習を通じて習得した知識とスキルを実証するための平等な機会をもてるようになります。

評価のために提出する課題をはじめ、すべての学習成果物は生徒自身が取り組んだものでなければなりません。つまり、生徒自身のオリジナルなアイデアに基づいたもので、他者のアイデアや成果物を使用する場合はそれを必ず明示しなければなりません。教師が指導する必要のある評価課題、または生徒が協働する必要のある評価課題は、IBが当該科目ごとに示している詳細なガイドラインを完全に守って完成させなければなりません。

IBおよびDPにおける学問的誠実性について、詳しくはIB資料（英語版）『Academic Honesty in the IB educational context』（IBの教育の文脈における学問的誠実性）、およびIB資料『ディプロマプログラム (DP) における学問的誠実性』、『DP：原則から実践へ』、『一般規則：ディプロマプログラム』を参照してください。DPの本科目で実施される

外部評価と内部評価 (IA : internal assessment) の評価要素 (コンポーネント) にまつわる学問的誠実性についての具体的な情報は、本資料に記載されています。

出典を明らかにする

生徒が評価のために提出する課題で使用した文献はすべて明記しなければならないことを、コーディネーターと教師は改めて認識する必要があります。この要件について、以下に説明します。

DP の生徒は評価用の課題をさまざまな形で提出しますが、これらには印刷媒体あるいは電子媒体で公開された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどが含まれている場合があります。生徒が他者の成果物やアイデアを用いる場合は、標準的な参考文献の形式を一貫して使用し、出典を明示しなければなりません。それを怠った場合は、規則違反の可能性があると IB によって調査され、場合によっては IB の資格授与委員会 (IB final award committee) から処分を科される可能性があります。

IB では、生徒が使用すべき参照や引用の形式を指定しておらず、学校のしかるべき教職員に判断を委ねています。生徒が選ぶ科目、使用言語、および参考文献の形式が非常に多岐にわたることから、特定の形式を指定することは非合理的であり、制約をもたらします。実際には、一部の形式が最も一般的に使われることになるかもしれませんが、形式の選択はあくまで学校側の裁量であり、生徒が選択する科目や言語に適切であることが重要です。学校が当該科目に対してどのような参照形式を指定しているとしても、著者名、発行日、文献名、およびページ番号は該当するかぎり最低限盛り込まなければなりません。

生徒は、標準的な形式を一貫して使用し、言い換えたり要約をした文献も含め、すべての出典を明らかにします。執筆にあたっては、自分の言葉と他者の言葉を明確に区別しなければなりません。これには引用符 (または字下げなど他の方法) を用い、参考文献目録中の文献を指し示す適切な記載をします。電子媒体の文献を使用する場合は、その文献にアクセスした日も記載する必要があります。引用や参照の能力を完璧に示すことは求められていませんが、使用したすべての文献を明示することが求められています。印刷媒体や電子媒体で出版されている自分自身のものでない視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどは、すべて出典を記載する必要があります。この場合も、参照と引用の適切な形式を用いなければなりません。

学習の多様性と学習支援についての要件

学校は、学習支援が必要な生徒に対して平等なアクセスへの配慮と妥当な調整がなされていることを以下の資料に沿って確認しなければなりません。

- ・ IB 資料『受験上の配慮の必要な志願者について』
- ・ IB 資料 (英語版)『Learning diversity and inclusion in IB programmes (IB プログラムにおける学習の多様性と包含性)』

「言語 A：文学」の学習

DP における「言語と文学」の学習

「言語と文学」（グループ 1）の 3 つのコースはどれも、さまざまな言語や文化的文脈をもち、対象となる言語を教育的な文脈で使用したことのある生徒を対象に設計されています。各科目の特性に従い、学習の焦点が異なります。

生徒の言語的背景はそれぞれ異なりますが、受容スキル (receptive skills)、産出スキル (productive skills)、およびやりとりのスキル (interactive skills) 求められ、コースを履修することでそれらの能力がより強固なものになることが期待されます。具体的には、言語運用能力、流暢さ、言語使用範囲の広さ、そして特にテキスト分析に適切な語彙を習得することが期待されます。また、文学および非文学テキストの探究を通して、さまざまな概念に対する理解を深め、理解したことを解釈、分析、および評価し、それを明確に順序だて、まとめた形で表現します。

「言語と文学」の 3 つのコースにはそれぞれ特徴があり、社会的、芸術的、文化的リテラシーを深め、言語能力やコミュニケーション能力を向上させ、さらなるアカデミックな学習やその後のキャリアに続くよう構成されています。各コースのシラバスと評価の要件は、受講できるすべての言語で同一です。「言語と文学」のコースの学習における指導と評価は、その言語で行われます。

3 つのコースすべてにおいて、言語、文学、そしてパフォーマンスの要素を探究し、以下に焦点があてられます。

- ・ 読者、作者、テキストの関係性
- ・ 地理的空間と歴史的時間ごとのテキストの範囲と機能
- ・ テキスト間相互関連性の観点

この枠組みの中で、それぞれのコースで焦点が異なります。

言語は 3 つのコースすべてにおいて重要になりますが、「言語 A：言語と文学」のコースではより広義に扱われます。「言語 A：文学」コースと、「文学とパフォーマンス」コースでは文学テキストのみが焦点となりますが、「言語 A：言語と文学」コースでは文学および非文学テキストの両方を探究します。パフォーマンスは、「言語とパフォーマンス」コースにおいてのみの構成要素ですが、生徒のテキスト創作とパフォーマンス力、分析、そして応答は 3 つのコースすべてにまたがっています。

文学、非文学、ビジュアル、パフォーマンス用テキストの学習は、信念や価値観を通してどのように意味づけが行われるか、そして一人あるいは複数の読者から生まれる複数の見解がどのようにすり合わされるかを理解するための焦点を与えます。テキストを批判的に捉え、それに応答する、創作する、あるいはパフォーマンスをすることで、言語がどのように思考や存在を維持したり、それに疑問を呈したりするかを理解する糸口となりま

す。また学習を通して、すべてのテキストは形式、内容、目的、読者、そして社会や歴史、文化的状況といったそれに関わる文脈との関係性の中で理解されるものであるという認識を深めます。

期待される言語の使用、分析のレベル、そして批判的振り返り（クリティカルリフレクション）の程度については、3コースすべてに共通です。

「言語と文学」の3つのすべてのコースの学習において、パフォーマンスの中心性を重要視し、教師と生徒双方が文学テキストを表現するさまざまな方法について考えることを奨励しています。それを通じてさまざまな形式の文学テキストの演劇的特性や、作品の中で作者がヴォイス（語り手や登場人物の考え方や話し方の特徴）や話し言葉、音を活用する方法、またドラマチックな構成などを探究します。適切な場面では、指導と学習のアクティビティとして、テキストのその場でのパフォーマンスやその録画・録音、テキストのアダプテーション、パフォーマンスのアプローチを取り入れることもできます。

考察を含め、パフォーマンスが演劇以外の形で文学形式に応用される方法には以下のようなものがあります。

- ・ 小説における物語と対話、および詩におけるヴォイスと語り手のパフォーマンスの特性
- ・ さまざまなテキスト（特に詩）における異なる形式のリズムと音の使い方
- ・ 文学における記述形式と口述形式の関係性、演劇用脚本と実際の演技、詩と音楽、またフィクションとストーリーテリングの関係性
- ・ 記述されたテキストとその演劇用脚本へのアダプテーションや形式の変換との関係（例えば、映画、テレビ番組、舞台などのあらゆる形式への物語のアダプテーションや、詩やフィクションの朗読への形式の変換）

IB DP の要件を満たすために、生徒は「言語と文学」の3コースの中から1つを履修しなければなりません。それぞれ違う言語で「言語と文学」のコースから2つを履修するバイリンガルディプロマを取得できます。

「言語 A：文学」コースと「言語 A：言語と文学」コースはどちらも標準レベル（SL：standard level）と上級レベル（HL：higher level）で履修できます。「文学とパフォーマンス」は、「言語と文学」の学習と「芸術」の学習をつなぐ学際的科目で、SLコースでのみ履修できます。

「言語 A：文学」

このコースでは、生徒はテキスト評論のさまざまなアプローチを通じ、文学テキストのみに焦点をあてます。文学の特性、文学の中の言語やテキスト性の美的機能、および文学と世界の関係性について探究します。

「言語 A：言語と文学」

このコースでは、生徒はさまざまな媒体を通して広い範囲の文学および非文学テキストを学びます。適切な副読教材とともに、さまざまな文学形式とテキストタイプがどのよう

なコミュニケーション上の役割を担っているかを研究することで、言語そのものの特性、また言語がアイデンティティーや文化にどのように影響されるかについて学びを深めます。このコース学習のアプローチは広い範囲をカバーするように想定されており、文学理論、社会言語学、メディア研究、批判的言説（クリティカルディスコース）分析などが含まれるでしょう。

「文学とパフォーマンス」

このコースでは、文学とパフォーマンスの本質的要素を学び、それらのダイナミックな関係性を探究します。従来の文学分析を、パフォーマンスにおける実用的、美的、そして象徴的要素と融合させます。

SL と HL の違い

「言語 A：文学」のモデルは SL と HL で共通ですが、レベル間には大きな量的、質的違いがあります。

SL の生徒は 9 作品について学びますが、HL では 13 作品を学びます。

試験問題 1 は、SL・HL とともに、初めて読む 2 つの文学作品の抜粋や文学テキストをさまざまな文学形式から出題したもので、それぞれに考察を促す問い（ガイディングクエスション）があります。SL の生徒はそれらのうちの 1 つについて設問に対する分析を書きますが、HL の生徒は両方について分析を書かなければなりません。

また、HL の生徒には 4 つ目の評価要素として HL 小論文（HL エッセイ）、つまり学習した文学テキストか作品に関連した探究の道筋に取り組む記述課題が課せられます。1200 から 1500 語（日本語の場合は 2400 字から 3000 字）の小論文を書き、HL の生徒は文学研究へのより深い理解を示す必要があります。

SL と HL の違いは、以下の表のとおりです。

学習する作品	SL	HL
指定作品リスト（PRL：prescribed reading list）にある作家の翻訳作品	最低 3 作品を学習	最低 4 作品を学習
PRL にある作家によるもので、学習している言語で原作が書かれている作品	最低 4 作品を学習	最低 5 作品を学習
自由選択作品	自由に選択した 2 作品を学習	自由に選択した 4 作品を学習
学習した作品の合計	9	13
外部評価	SL	HL

学習する作品	SL	HL
試験問題 1 : 設問つき文学分析	2つの選択肢の中から1つ、初めて読む文学作品の抜粋や文学テキストについて、設問に応じて分析を行う	初めて読む文学作品の抜粋や文学テキストについて、2つの設問に対する分析を行う
HL 小論文		1200 から 1500 語（日本語の場合は 2400 字から 3000 字）の小論文で、学習した文学作品に関連した探究の道筋に取り組んだもの。

「言語と文学」と「コア」

「言語と文学」と TOK

TOK のコースでは、知識の本質 (nature of knowledge)、そしてそれがどのように構築され表現されるのかについて考察します。「言語と文学」のコースでも同様に、人間の経験の本質を探り、個人的見解がどのように構築され、表現されるのかについて探究します。生徒は、自らの学習を TOK に関連付けることで、言語と文学は知識習得への強力な方法でありながら、一方でそれは人生や現実を正確に反映するものではなく、構築されたものに過ぎないという事実に気づきます。

また、学習を通して他者の観点に気づきを得ることで、生徒は自分自身の個人的見解、例えば自身の時間や場所といったものに関して再認識します。これらの振り返りによって、TOK との結びつきがより強固になります。

「言語と文学」のコースの学習において、生徒は、テキストを通してどのように意味が作り出されるのかについて日常的に探究し、批判的思考と振り返りを行います。よって、これらのコースはさまざまな「知るための方法」と「知識に関する問い」を検証する能力を培います。例えば、これらのコースでは、読み手がテキストの意味をどの程度構築するか、テキストが翻訳されたときの影響、またテキストがどのように自己や社会の理解を促すか、と日常的に問いかけることは探究における重要な焦点となります。TOK の問いの例は、シラバスの各探究領域にも記載されています。

「言語と文学」と CAS

「言語と文学」は、CAS の補足となりうる重要なものです。生徒は、テキストに描かれた登場人物や場面に関わることで、他者や自己についての理解をより深め、共感する能力を身につけます。また、コースにおける課題は批判的思考を育むものです。テキストとの関わり、また生徒同士の相互の関わりの中で、自身の仮説をテキストの中のエビデンスや他の読み手の解釈と継続的に照らし合わせることで、自身の推論や信念がテキストの意味をどのように構築しうるかを振り返り、評価します。その結果、生徒は批判的な距離を保つことで、意見や仮説を吟味し、それがどの程度事実に基づいているかを決定することが出

来るようになります。これらのスキルは CAS でも役に立つもので、生徒は CAS 活動やプロジェクトがおよぼす影響について振り返り、それに基づいて将来の行動を計画するようになります。

「言語と文学」のコースの大きな目的の 1 つは、このような読書経験を生徒の生活に関連づけることです。例えば、内部評価はテキストのテーマや態度と、現代のグローバルな問題を結びつけることに重点を置き、生徒がクラス内で得た理解を有意義に自身の生きる実社会に応用および転移していくことを奨励します。これにより、CAS 活動や、現地の状況の中でグローバルな問題へと取り組むプロジェクトに彼らがコミットする意欲を高めることにつながります。CAS 活動あるいはプロジェクトに取り組むことで、テキストに描かれた状況をより深く理解することができ、それによりコースがより豊かなものになるという還元効果も期待できます。

CAS 活動やプロジェクトと「言語と文学」のコースは、広い領域でつながりをもたせることができます。以下にその例を示します。

- ・ 文学散策ツアーを計画、あるいはそのようなツアーに参加して、作家の伝記にまつわる場所、読んだテキストの中に登場する印象的な場面などを訪れ、それについて表現したり話し合ったりします。3 つの柱である創造性、奉仕、活動は、生徒が実際にツアーを立案することで実現し、また活動と創造性に関しては、生徒が散策ツアーに参加して、その後に創造的な成果物を作成します。単にツアーに参加したというのは、活動の部分のみになります。
- ・ 学習したテキスト内に記されたグローバルな問題についての問題提起を促すイベントを計画し、実行するというのは、創造性と奉仕にあたります。
- ・ 視覚障害者のために学習したテキストのオーディオブックを作ったり、学校の図書館員のために既存のオーディオブックに出てくる俳優や朗読者のパフォーマンスを批評します。これは創造性と奉仕にあたります。
- ・ 校内で、下の学年の生徒とともに読書クラブや文学サークルを立ち上げて運営します。これは創造性と奉仕にあたります。

各科目と CAS のつながりは単発の活動、あるいはプロジェクトとして発展させることもできます。

ただし、このつながりが最終的にどのような形式をとるにしても、CAS 活動またはプロジェクトは、生徒の DP コースの必須要件とは明確に区別し、コースの要件に含んだり、使用してはいけません。

「言語と文学」と EE

「言語と文学」の EE を書くことで、生徒には特に興味のある文学や言語についてのトピックについて自由に研究を行う機会が与えられます。生徒はまた、好きなテキストや作家について研究し、「言語と文学」のコースで培った分析能力や解析能力を自由に応用することができます。これにより、高度なリサーチスキル、書くスキル、批判的思考、創造性を育成し、知的発見を促すことを目的としています。

「言語と文学」の EE は、クラス内で扱ったテキストや作品に基づくものであってはいけません。

言語あるいは文学の分析に対する妥当なアプローチを探ることを目的とします。トピックの扱いは分析的であることが求められます。生徒は二次資料を研究することもできますが、EE は基本的にトピックに対する独立した研究でなければなりません。

EE には次の 4 種類があります。

- ・ 文学的焦点をもつ EE。生徒は、EE の言語と同じ言語で書かれた 1 つ以上の文学テキストに基づくカテゴリ 1 か、EE の言語と同じ言語で書かれた 1 つ以上の文学テキストと、他の言語で書かれた 1 つ以上の文学テキストを比較する論文であるカテゴリ 2 から選択します。
- ・ 言語学的焦点をもつ EE。この場合はカテゴリ 3 の論文となります。このアプローチは、論文の言語と同じ言語で原文が書かれた非文学テキストの制作およびそのテキストに対する世間の評価に焦点を置くものです。EE はさまざまな言語と文化の比較や対比を含むこともありますが、主な焦点は学習している言語における言語と文化でなければなりません。
- ・ 文学テキストとそのパフォーマンスの関係性の研究として、双方に存在する創造性と批判的関係性を探る EE。この選択肢に興味のある生徒は、「文学とパフォーマンス」の EE を選択し、テキストと、それがどのようにパフォーマンスに変換されるのかを研究します。これは「言語と文学」のコースにおいて書くことができる、2 つの学際的な EE のうちの 1 つです。「文学とパフォーマンス」の EE には創造性の要素が加わることもありますが、分析と論理的な議論が非常に大切になります。
- ・ 「ワールドスタディーズ」の EE。学際的リサーチプロジェクトとして現代の主要なグローバルな問題を、DP の 2 つの科目の方法論、概念、および理論に基づいて研究します。トピックは以下の指定された 6 つの中から選択します。
 - 紛争、平和、安全保障
 - 文化、言語、アイデンティティ
 - 環境または経済の持続性（もしくはその両方）
 - 平等と不平等
 - 健康と開発
 - 科学、テクノロジー、社会

これらはすべての DP 科目に対して共通のものです。しかし、文化言語学、美学、言説分析、批判的見解などの「言語と文学」の核となる要素は、6 つの大きなテーマすべてに広く応用され、生徒のグローバルな意識づけの向上に重要な役割を果たします。

「言語と文学」と国際的な視野

国際的な視野は IB の中核を成す要素です。IB の理念の中心にあり、IB における教育方針と実践を導き、支えるものです。

「言語と文学」は自己、そして周りとのつながりに対する意識と理解を深めます。学習している言語による原作、また翻訳されたテキストの学習を通して、生徒はさまざまな言語

と文学が世界を表現する方法を理解し、それがどのように多様なアイデンティティーの構築に寄与しているかを学びます。生徒はまた、文化によって世界の表現の仕方が異なることに気づき、その理由を考察し、人々が世界を経験し表現する方法について理解を深めます。

「言語と文学」のシラバスでは、決められた数のテキストを翻訳で読むことが求められ、多様なものの見方を代表するようなテキストを選ぶことを薦めています。PRL の作成にあたり IB は、多くの作者を含み、権威のある作家だけでなく現代作家、男性作家、女性作家から、そして当該言語が複数の国で使われている場合は、さまざまな地域と国から作家を選ぶようにしています。PRL はまた、教師がクラス内の学習に使用する作品も同様にバランス良く選択されるよう奨励するものです。それにより、人々の経験がさまざまな形で表現されることを生徒が十分に鑑賞することができることを目指しています。

「言語と文学」のコースは、生徒の国際的視野を養うことで、「IB の学習者像」に示された人物像の発展にもつながります。自己の観点と異なる価値観を示すテキストを読むことによって生徒は、

- ・ 批判的思考のスキルを活用し、テキストの中で表現された経験の本質、またそれらの経験を表現する方法について理解する（考える人）
- ・ テキストに表現される多様な視点や、人生における経験と関連づけて好奇心を養う（探究する人）
- ・ これまで意識を向けたことのない地球規模の問題や考えと向き合う（知識のある人）
- ・ 他者の考えや価値観、伝統を、探究心をもって鑑賞する（心を開く人）
- ・ すべての人の尊厳や権利は尊重されるべきであると理解する（信念をもつ人）
- ・ 他者を思いやり、共感し、尊重する（思いやりのある人）
- ・ 人間同士の、また暮らしの中における人と社会の相互依存性を認識する（バランスのとれた人）
- ・ 他者、他のグループの見解によく耳を傾け、自身の考えをできるだけ明確に表現する（コミュニケーションができる人）
- ・ 自己の世界観を問う（振り返りができる人）
- ・ 見解を変えることに偏見がなく、そのような変化がどのように行動へ結びつくかを考える（挑戦する人）

「言語と文学」のコースを通し、地域やアイデンティティー、関係性がテキストにどう表現されているか、そしてこれらが自分の捉える世界観とどう関わっているかを学ぶ多様な機会が与えられます。生徒はまた他の現実、他の人々の描写を経験することができ、それによって自分のものとは異なる世界観に通じることができます。このように「言語と文学」のコースは、地域とグローバルの相互作用についてより深く考察する機会を生徒に提供し、さまざまな文化に対する批判的思考と意識を高めます。

慎重な取り扱いを要するトピックへの取り組み

すべての「言語と文学」のコースでは、広範なテキスト、アプローチ、考え、きっかけ、解釈を取り扱います。これらは個人的、地域的、グローバルな意味をもっています。この

ような作業を通して生徒は知的、個人的、そして文化的に難しいことに取り組んだり、また慎重な取り扱いを要するものや、大人向けの内容に触れることがあります。テキストや議論した問題を通して慎重な取り扱いを要するトピックに明確に着目し、提示されたさまざまな観点について生徒が批判的に考察することが奨励されます。

これらのコースで慎重な取り組みを要するトピックを扱うにあたり生徒は、受け取る側、作り出す側どちらの場合においても、他の生徒やより大きな学びのコミュニティへの適切な配慮をするべきです。ディスカッションを行うための安全な環境を確保することは、教師の大切な役割の1つです。一般に、「言語と文学」のコースにおける慎重な取り扱いを要するトピックへのアプローチは知的で批判的な眼を通して行われるべきであり、不当に過剰な扱いや表面的な扱いを避け、国際的な視野とさまざまな文化に対する敬意への IB のコミットメントを常に念頭において取り組まなければなりません。

事前の学習経験

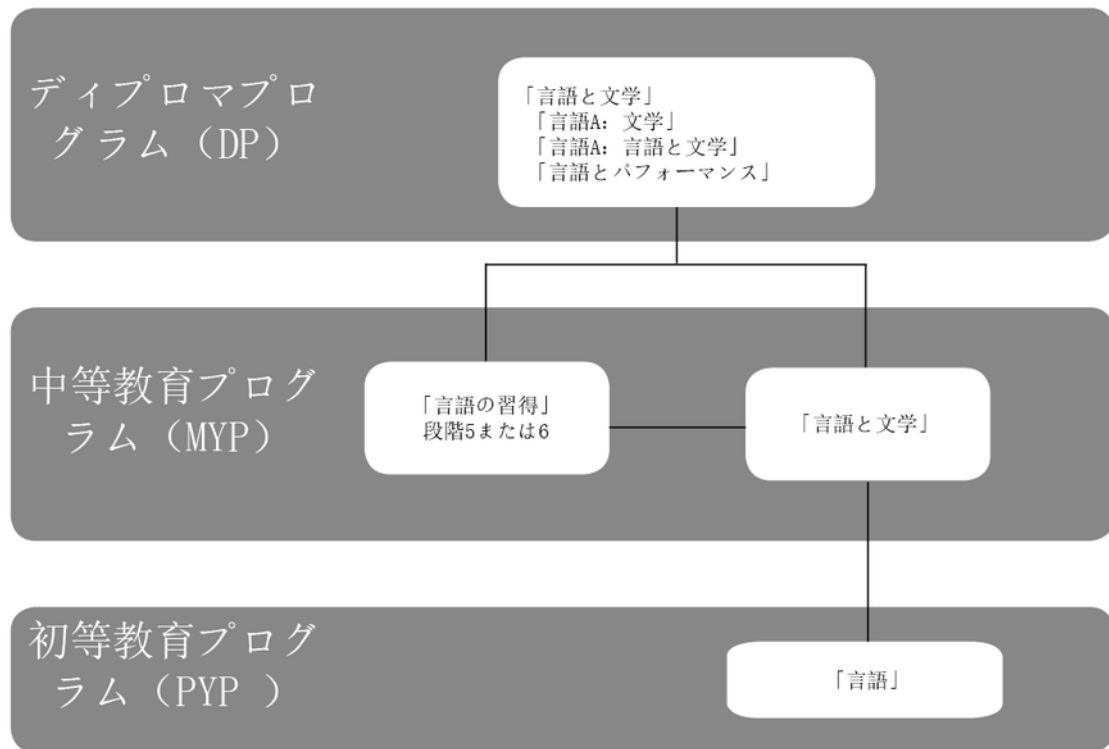
生徒が「言語と文学」のコースを履修するにあたり正式な要件はありません。このコースを履修する生徒の言語の習得歴はさまざまで、多言語話者の場合もあるでしょう。テキストに関する批判的な小論文を書いた経験があることが望ましいですが、そうした経験がなくても「言語と文学」の学習は可能です。学校は、プログラム・リソース・センターにある IB 資料の『母語以外の言語による IB プログラム学習』を参照してください。各コースで、言語の継続的発達やテキスト分析、文学鑑賞をめぐる表現など、多様なスキルの習得に取り組みます。どのコースを選択するかは、生徒や教師の関心、そして生徒が希望する今後の学習目標などによります。

中等教育プログラム（MYP）との接続

中等教育プログラム（MYP : Middle Years Programme）は 11 歳から 16 歳までの生徒を対象にした IB の一貫教育における重要な一部で、DP に直接つながるものです。MYP の「言語と文学」では、生徒は DP の「言語と文学」のコースに備えることができます。

MYP の『「言語と文学」指導の手引き』では、MYP の「言語と文学」の学習から DP の学習へと継続する生徒のために、以下の IB の一貫教育の図を示しています。

図2
IBの一貫教育におけるDP「言語と文学」への経路



生徒がMYPの「言語と文学」のコースをすでに履修している場合、DPの「言語と文学」のコースが妥当な選択となります。それにより生徒の言語能力と、それまでの言語と文学の経験にふさわしい難易度が保証されます。「言語と文学」の3つのコースからどのコースを選ぶかは、個人の好みによります。レベルの選択は、生徒の過去のMYP「言語と文学」のコースにおける成績と、6つの学習領域にまたがるSLとHL教科の配分に関する全体的な決定に基づきます。

MYPで「言語の習得」コースのフェーズ5あるいは6まで到達した生徒は、DPの「言語と文学」のコースを履修し、よい成績をとることも可能でしょう。しかし、MYP『「言語の習得」指導の手引き』に記載されているように、これらのDPコースに進む前に少なくとも1学期間はMYPの「言語と文学」を履修することが推奨されています。これによって両方のプログラムのコース間の移行がスムーズになります。この場合、「言語と文学」において最も適したコースおよびレベルについては、教師と相談したうえで決定すべきです。

MYPの「言語と文学」のコースで、生徒はコミュニケーション、つながり、創造性、ものの見方などの重要概念、および科目ごとの関連概念を通して言語と文学を鑑賞し、理解を深めます。

DPの「言語と文学」のコースでも概念的な焦点が維持されています。MYPの「言語と文学」コースで指定されている4つの重要概念をさらに深く探究し、より具体的に再定義

し、生徒の学問的発展の段階にふさわしい他の概念を補完することで身についた基礎を元に、これらのコースは構成されています。

口述、記述、および視覚的なコミュニケーションを通じて言語と文学への理解を深め、創造的・個性的な方法でかつ想像力を活かし、生徒は分析力と構成力を身につけます。MYP の「言語と文学」における 6 つのスキル領域は、聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと、見ること、そして発表することです。これらは独立したスキル、またそれぞれ相関性のあるスキルとして育まれます。

DP の「言語と文学」のコースでは、これらのスキルをさらに習熟させ、多様な文化の理解と地域、国、グローバルレベルでの取り組みを奨励します。また各コースでは、幅広いジャンルのテキストを研究したり、文脈に沿って言語を学習することで、国際的な視野を養います。

DP の「言語と文学」のコースは、MYP の「言語と文学」で培った基礎の上に構築されます。生徒の表現力と、さまざまな言語領域への理解を継続的に着実に伸ばしていくことを目指しています。

IB のキャリア関連プログラム（CP）との関連性

IB のキャリア関連プログラム（CP：Career-related Programme）は、キャリアに関連する学習をしたい生徒のために考えられた独特なプログラムで、IB のビジョンや教育原理を組み込んだ国際教育の枠組みです。CP の柔軟な教育的枠組みで、学校側は生徒のニーズや背景、状況に対応することができます。

CP の目的は、生徒に学術的および実用的な基盤を与え、その後の学習と専門的なトレーニングに役立たせることです。これにより、社会人としての成功を確実にします。「言語と文学」のコースでは、多様な記述および口述課題を通して言語的、分析的、そして創造的スキルを養うことで、この目的を達成します。

生徒には協働する機会が与えられ、変容し続ける仕事環境に効果的に参画できるよう準備します。ATL スキルを通して、CP の生徒は自己を振り返り、創造的および批判的に思考し、自信をもってコミュニケーションをとるよう促されます。多様なテキストの学習を通して、他者のニーズやものの見方、価値観、態度などについて考えるように生徒に働きかけます。コースの全般的な要件によって、生徒は多様なテキストとものの見方を通して自主性のある学習者となり、地球市民となるように促されます。

「言語と文学」のねらい

「言語と文学」のすべての科目はいずれも、以下を学習のねらいとしています。

1. さまざまな媒体や形式、異なる時代、スタイル（文体）、文化からの多様なテキストに触れる
2. 話す、読む、書く、見る、発表する、およびパフォーマンスのスキルを伸ばす
3. 解釈や分析、評価のスキルを伸ばす
4. テキストのフォーマルで美的な性質への感性を磨き、またそれらがどう多様な応答や複数の意味をもたらすのかを鑑賞できるようになる
5. テキストと多様なものの見方、文化的文脈、地域とグローバルな問題との関わりについて理解を深め、またそれらがどう多様な応答や複数の意味をもたらすのかを鑑賞できるようになる
6. 「言語と文学」と他の教科の関係性への理解を深める
7. 自信をもち、創造的な方法でコミュニケーションをとり、協働する
8. 言語と文学に対して、生涯にわたって関心と喜びをもつように促す

評価目標

1. 知識、理解、解釈
 - ・ 多様なテキスト、作品、およびパフォーマンス、それらの意味と含意
 - ・ テキストが書かれた文脈と受けとられる文脈
 - ・ 文学的、文体的、修辞的、視覚的、そしてパフォーマンス技術的な要素
 - ・ テキストタイプと文学形式の特徴
2. 分析と評価
 - ・ 言語の使い方がどう意味を生成するか
 - ・ 文学的、文体的、修辞的、視覚的、または演劇技術の使用法と効果
 - ・ さまざまなテキスト間の関係性
 - ・ 人間が抱える問題に対して、テキストがどのような見解をもたらしているか
3. コミュニケーション
 - ・ 明確で論理的、説得力のある方法で考えを表現する
 - ・ さまざまなスタイルや言語使用域（レジスター）を用い、多様な目的と状況に応じて表現する
 - ・ 考え、感情、人物、雰囲気パフォーマンスを通じて表現する（「文学とパフォーマンス」のみ）

評価目標の実践

評価目標	この評価目標はどの評価要素で測られるか。	評価目標はどのように取り組まれているか。
知識、理解、解釈	試験問題 1	初めて読む文学作品の抜粋に対して、文学形式に関する知識と理解を示し、テキストや抜粋を自分なりに解釈し、結論を導き出す。
	試験問題 2	2つの作品に関する小論文であり、与えられた焦点と関連づけて作品への知識と理解を示し、作品が示唆するもの、および類似点と相違点を解釈する。
	内部評価	コース内で学習した2つの作品についての知識と理解を示し、またそれらをグローバルな問題に関連づけて解釈する。
	HL 小論文	学習した作品のうち1つに対する知識と理解を示し、自分で選択した探究の道筋に関連してそのテキストまたは作品を解釈する。
分析と評価	試験問題 1	初めて読む文学作品の抜粋を探究し、それに対し、作者の選択がどのように意味づけに寄与したかの分析と評価を行う。
	試験問題 2	与えられた問いで聞かれていることに関して、2つの学

評価目標	この評価目標はどの評価要素で測られるか。	評価目標はどのように取り組まれているか。
		習作品の比較分析と評価を行う。
	内部評価	2つの学習作品について、両方に見られるグローバルな問題という観点で評価し、それら独自の観点が作者の選択によってどのように構築されたかを分析、評価する。
	HL 小論文	自分で選択した探究の道筋に関連して、学習した作品のうち1つを分析・評価する。
表現する	試験問題 1	正式な小論文にふさわしい言語を用い、理路整然とした一貫性のある分析を行う。
	試験問題 2	理路整然とし、2つの作品をバランスよく比較しており、与えられた問いに的確に焦点を合わせた正式な小論文を書く。
	内部評価	生徒自身が選択したグローバルな問題に焦点をあてながら、理路整然としており、一貫性と説得力をもつバランスのとれた口述発表をする。
	HL 小論文	作品に関連して、探究に焦点をあてた正式な小論文を書く。小論文は正式なものであり、効果的に構成され、優れた文献参照・引用スキルを示していること。

シラバスの概要

シラバスの構成	授業時間	
	SL	HL
読者、作者、テキスト 作品は、さまざまな文学形式から選択されます。作品の学習の焦点は、文学テキスト、読者、作者の関係性にあてることができですが、文学と文学学習の本質を焦点とすることもできます。この学習には、読者の応答および文学テキストが意味を生成する方法に関する探究も含まれます。文学テキストの細部について、個人的な応答および批評を構築することに焦点をあてます。	50	80
時間と空間 さまざまな歴史的、文化的観点を反映するよう作品を選択します。これらの学習では、文学テキストの文脈および文学テキストが社会全般を反映し形づくるさまざまな方法に焦点をあてます。個人的、文化的な観点を考察し、より広いものの見方を養い、文脈と意味のつながりを認識することに焦点をあてます。	50	80
テキスト間相互関連性：テキストをつなげる 学習の範囲を拡張し、有意義な比較をする機会となるように作品を選択します。これらの学習では、コースを通して学んできた多様なトピック、テーマに関する問題、一般的手法、文学形式、文学的伝統などを探究しながら、文学テキストのテキスト間相互関連性に焦点をあてます。文学テキスト間の複雑な関係性の理解に基づいた批評を発展させることに焦点が置かれます。	50	80
総授業時間数	150	240

各探究領域について示された時間数は、時間を指定したり制限したりするためのものではありません。テキストの学習では領域間で重複することが多々あるからです。それぞれの領域で好ましいとされるテキストへのアプローチがバランス良くなるように、クラス内の活動を慎重に計画する必要があります。

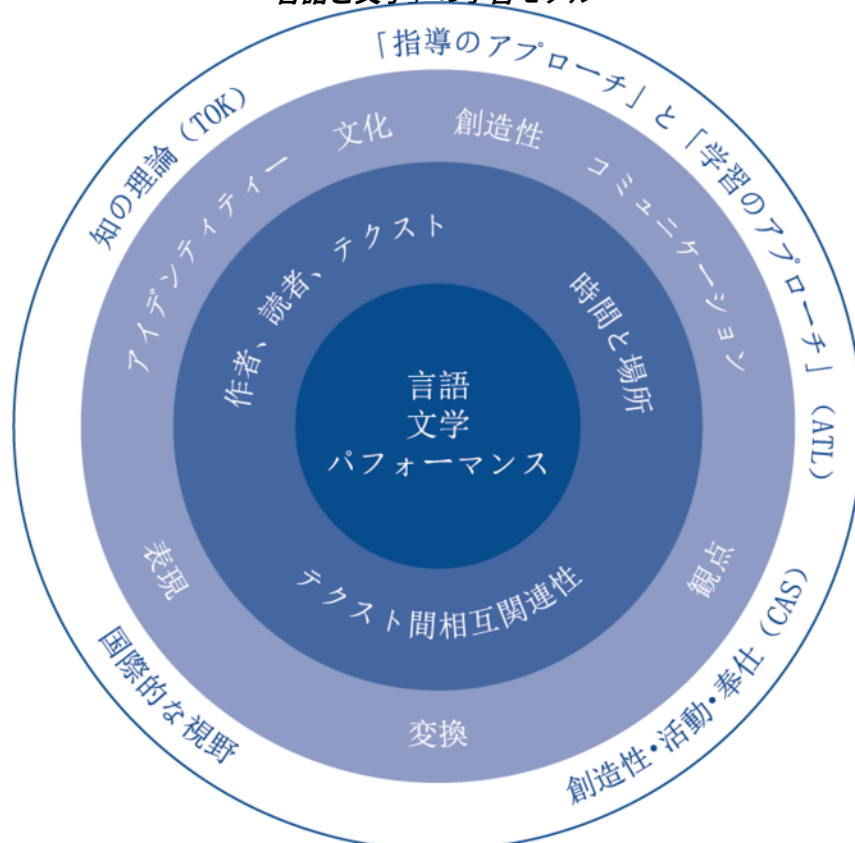
推奨授業時間は IB 資料『一般規則：ディプロマプログラム』（第 8.2 条を参照）の資料に記載されているとおり、HL が 240 時間、SL は 150 時間です。

シラバスの内容

「言語と文学」の学習モデル

「言語と文学」のコースでは概念学習という考え方が基礎になっています。つまり、生徒は科目の主要概念に取り組むことで、どんなテキストタイプに対しても柔軟で批判的な読者となります。このモデルは、「言語と文学」の3つのコース、主な学習トピック、主要概念との関係、そしてそれらがIBのDPの核をなす原理とどのように関連しているかを表しています。

図3
「言語と文学」の学習モデル



全3コースの学習の中心にあるのが、言語、文学、パフォーマンスの領域です。これらの要素が強調される度合いは各コースで異なりますが、どのコースにおいても多かれ少なかれ取り扱います。

言語、文学、パフォーマンスの学習、および関連スキルの発達は3つの探究領域に分かれています。1) 読者、筆者、テキストの相互作用の本質についての探究、2) テキストが時間と空間にどう関わるかについての探究、3) テキスト間相互関連性についての探究と

テキスト間にどのようなつながりがあるのかについての探究、とされています。これらの3つの領域はコースの進度に合わせ順を追ったアプローチとなるように見えますが、図に示されるように、これらの領域には重複している部分も多く、反復的つまり循環的であるため、柔軟にコースデザインができます。

「言語と文学」全体が、DPの「コア」の必修要件、IBの学習全体に関わる原理、TOK、CAS、EE、「指導のアプローチ」とATL、国際的な視野に結びついています。

生徒が「言語A：文学」のコースで学ぶこと

「言語A：文学」のコースにおいて、生徒は、複数の文化や歴史を超えた効果的な執筆形態としての文学のさまざまな形について学びます。文学の創作と受容に資する以下の要因を探究し、理解を深めます。

- ・ 作者と読者の創造性
- ・ 作者と読者がもつそれぞれの文脈との相互作用、および文学的伝統との相互作用の本質
- ・ 言語が意味や効果を生成する方法
- ・ 文学作品の創作と文学作品への応答がもつパフォーマンスおよび変換の可能性

多様な形式をとり、異なる時代と場所で創作された数多くの文学テキストを詳細に分析することを通して、生徒は、自分自身の解釈と他者の批判的観点を考察します。そしてこの考察は、それぞれの観点がどのように文化的信念体系によって形づくられているか、テキストの意味がその中でどのようにすり合わせられるかを探究する機会にもなります。生徒は、批評および創作プロセスに取り組むことで、テキストが読者に与える影響と、テキストの意味に対する読者の柔軟性についての認識を形づくることができます。文学に焦点を置くこのコースでは、言語の美的使用に対する感受性を培い、文学が世界的、社会的、文化的なアイデンティティを表現し構築する方法について考える術を生徒に与えることを特に課題としています。

コース要件

SLでは、3つの探究領域すべてにおいて最低9つの作品を学習し、HLでは、最低13の作品を学習しなければなりません。

IBは、「言語と文学」のコースで使用できるさまざまな言語の作家のPRLを作成しました。このリストはオンラインで利用でき、検索もできるので、教師は多様性を確保しつつコース要件にかなう何名かの作家を選択することができます。各言語の文学探究のスタート地点として作家が6人ずつ紹介されています。この推薦リストに従うかどうかは、教師自身が決められます。

作品を選択する際に教師は、文学形式、時代、場所のバランスを考慮すべきです。また、さまざまな人間的、または芸術的な経験を取り入れるように努めてください。

SLの生徒は次にあてはまる最低9つの作品を学びます。

- ・ PRLに載っている作家により、学習している言語で原作が書かれた作品を最低4つ

- ・ PRL に載っている作家の翻訳作品を最低 3 つ
- ・ 2 つは PRL からでもそれ以外からでも自由に選択することができ、翻訳作品もそれぞれの探究領域で最低 2 つの作品を学ぶこと。作品は、3 つの文学形式、3 つの時代、および最低 2 つの大陸に存在する 3 つの国または地域（PRL で定義）を取り扱うことができるよう選択すること。

HL の生徒は次にあてはまる最低 13 の作品を学びます。

- ・ PRL にある作家によるもので、学習している言語で原作が書かれている作品を最低 5 つ
- ・ PRL にある作家の作品の翻訳を最低 4 つ
- ・ 4 つは PRL からでもそれ以外からでも自由に選択することができ、翻訳作品も可。それぞれの探究領域で最低 3 つの作品を学ぶこと。作品は、4 つの文学形式、3 つの時代、および最低 2 つの大陸に存在する 4 つの国または地域（PRL で定義）を取り扱うことができるよう選択すること。

「言語と文学」のコースで定義されている作品とは、小説、自伝、伝記などの主だった文学テキスト 1 作品、中編小説などやや短い文学テキスト 2 作品かそれ以上、短編が 5 から 10 作品、エッセイが 5 から 8 作品、手紙が 10 から 15 作品、長編詩全編かまとまった分量（最低 600 行）、あるいは短い詩 15 から 20 作品。複数のテキストを作品の一部として学習する場合、同じ作家の作品でひとつの文学形式における同一のサブカテゴリーに属していなければなりません。

それぞれの探究領域で学ぶ考え方やスキルは、コース全体に組み込まれた大切なもので、重複もたくさんあります。教師は、学習すべきテキストタイプと作品の範囲、コースの各領域の学習に必要な時間、生徒のスキルの習熟、学習成果、行われるパフォーマンス、評価の締め切りを必ず考慮して指導の順序を考えるようにします。コースのモデルに関するより詳しい案内は「言語 A」TSM を参照してください。

作家

「言語 A：文学」のコースでは、同一の作家について 2 度学習することはできません。「言語 A：文学」の生徒が以下を学習することは認められません。

- ・ 「言語と文学」の別のコースの一部としてすでに学習している作家
- ・ 「言語 B」のコースの一部としてすでに学習している作家

「言語 A：文学」では、コース内で学習した作家について EE を書くことができますが、これは同じ作家の別の作品を選択した場合のみです。

文学形式

PRL には 4 つの文学形式が含まれています。SL では、作品の学習にあたり 3 つの文学形式を選択します。HL では、4 つの文学形式を学習します。PRL に記載された作家については、その作家の作品が書かれたすべての形式において学習することができ、かかる形式と作家の関連性が言及されている必要はありません。

時代

PRL ではさまざまな時代を扱い、作家を彼らが生きていた時代別に分類しています。「言語 A：文学」のシラバスでは、全体を通して、少なくとも3つの時代からそれぞれ作家を選ばなくてはなりません。

場所

PRL では、作家にゆかりの国や地域がわかるようになっています。SL の「言語 A：文学」のシラバスでは、少なくとも3つの国あるいは地域からそれぞれ作家を選び、最低2つの大陸を含まなければなりません。HL のシラバスでは、少なくとも4つの国あるいは地域からそれぞれ作家を選び、少なくとも2つの大陸を含まなくてはなりません。

探究領域

読者、作者、テキスト

読者がテキストの意味を生成するように、テキストも読者を形づくっている。
シュロミス・リモン＝ケナン（2005年）

この探究領域では、生徒に文学とその学習の本質について紹介します。生徒が行う学習では、さまざまな文学形式におけるテキストを詳細に研究します。それにより作家の意図や、意味が作り出される方法を学びます。また同時に、生徒が抱く個人的な応答が、その生徒自身を含む読者のコミュニティーに左右される集団的理解や解釈へと移行していくことを受け、意味の構築における読者の役割にも焦点をあてます。他の読者とのやり取りによって、構築、すり合わせされた意味の本質への認識を高めます。

生徒は文学の芸術的本質を理解することを学びます。また、文学テキストが独自の思考や感情を表現する効果的な手段であること、文学テキストが効果を発揮するうえで、経験豊富な読者としての自らの観点が欠かせない要素であることも理解します。

この領域の学習は、生徒が鍵となるテキストの特徴を理解し、それらがどのように意味を構築したり意味に影響したりするかを理解する能力への自信を強化できるよう構成する必要があります。精読を必要とし、生徒がさまざまな文学形式の要素に触れることができるような作品を選択することができます。さまざまな特徴を列挙したり定義したりするのではなく、要素の特定や個別の効果の考察を越え、複雑に構築された文学テキストの本質を見抜くことがねらいです。詳細な学習を進める中で、文学の専門家としてテキストとテーマに取り組む方法を生徒に示すことができるよう学習活動を構築します。生徒の執筆物と応答は、個人的なものや学術的なもの間を行き来し、あるいは創作的なものや説明的なもの間を行き来することがあります。

「読者、作者、テキスト」の探究領域では、文学テキストを詳細に研究するスキルとアプローチを身につけ、また以下の考察を促す概念的な問いを考えることで教科のメタ認知の意識づけにも触れることをねらいとしています。

- ・ 私たちが文学を学ぶのはなぜか、またどのように学ぶのか。
- ・ 私たちは、さまざまな文学テキストからどのような影響を受けているか。
- ・ 意味が構築、交渉、表現、解釈される方法には、どのようなものがあるか。

- ・ 言語の使用は文学形式によってどのように異なるか。
- ・ 文学テキストの構成やスタイルは、どのように意味に影響するか。
- ・ 文学テキストはどのように洞察や課題をもたらすか。

考え得る TOK とのつながり

この領域での TOK とのつながりは、文学テキストからどのような知識が構築されるか、その知識はいかに構築されるか、どの程度まで文学テキストの意味が議論の余地がないものとして考えられるかという問いにまつわるものです。この探究領域から発生する TOK とのつながりの例

- ・ 文学を通して学ぶことは何か。文学が果たす役割は何か。その目的は何か。
- ・ 文学から得る知識の種類は、他の教科の学習から学ぶ知識とどのように異なるか。文学テキストを読むことで構築される知識に関して、どの程度確証がもてるか。
- ・ 文学テキストを読むことで得られる知識は、作者の意図、読者の文化的な前提、読者のコミュニティにおいてテキストに与えられる意義によってどの程度決定されるか。
- ・ 文学テキストの解釈で、より優れているものはあるか。解釈が複数ある場合、どのようにすり合わせを行うのが最善の方法か。
- ・ 文学への応答を説明するうえで、有効なエビデンスとみなされるには何が必要か。

時間と空間

世界の文学を隔てる究極の境界線は、読者の頭の中で作品が相互に交錯しあう中に見いだされる。そしてそれは、読者がある本の代わりに別の本を取り上げ、読み始め、新しい世界に否応なしに吸い込まれていくたびに、新たに再形成されるものである。

デヴィッド・ダムロッシュ (2009a)

この探究領域で焦点となるのは、文学テキストは真空状態では作り出されることも受け取られることもできないという考えです。文学テキストが創作され読まれた文化的文脈を、時間と空間を超えて探究し、また文学そのものの内容が社会を映し出す鏡となるという点についても探ります。生徒は、文化的状況がいかにして文学テキストの創作へ向かうのか、文学テキストが文化的状況をどのように反映または屈折しうるか、そして文化とアイデンティティーが文学テキストの受け取られ方に及ぼす影響について詳細に検討します。

また、文学テキストの表現方法や、文学テキストがさまざまな文化的、歴史的観点から理解される方法についても研究します。このような学びを通して、テキスト間の関係性が果たす役割、自己と他者、そして地域と世界がつながる方法についても認識します。これらの関係性は複雑でダイナミックなものです。作家の背景や読者の構成は明確でない場合も多く、簡単に説明できないこともあります。どの文学テキストも特定の文脈に即しており、ある時代と場所の社会的、政治的、文化的問題を扱ったり、表現したりしています。例えば、現代社会における作家の懸念を表現しようとした作品が、古代に設定されることもあります。地理的に離れた文化が共通の慣習や考え方をもちつつもあれば、近隣に暮らす人々が全く異なる伝統を守ることもあります。生徒は、そのような複雑な社会の枠

組みにおけるコミュニケーションの複雑さについて考え、また作品が変化する文脈で創作され読まれた場合に言語とテキストの解釈が暗示するものについても考えます。

この領域では、生徒がさまざまな場所、文化や時代からテキストと問題を探究することができるよう、作品を選択し学習します。文化、作家の経歴、歴史的出来事、あるいは批判的に受けとられた説話について考察あるいは研究しますが、学習の焦点は文学テキストそのものが提示するアイデアや問題にあります。また、これらの問題について文脈をより詳しく調べた方が理解が深まるかどうかも焦点となります。この探究領域において、生徒は文学テキストが政治的、社会的状況の側面を照らし出すことや、出来事のより微妙な違いを理解することが、文学テキストの理解や解釈に影響する可能性についても探ります。文脈の学習は、文学テキストと社会を静的な一対一の関係性としてとらえるのではありません。文学テキストを、時間と空間を超越し、影響力の強い「非人間要因」とみなします。

「時間と空間」の探究領域では、文学テキストのもつオープンで複合的で国際的な特性について、以下の考察を促す問いについて考慮することで、生徒の理解をより深めることをねらいとしています。

- ・ 文学テキストの創作と受け止め方において、文化的、歴史的な文脈はどの程度重要か。
- ・ 自分とは異なる時代と文化から生まれた文学テキストにどのようにアプローチするか。
- ・ 文学テキストはどの程度他の文化について見解をもたらすか。
- ・ 文学テキストの意味と影響は、時間の経過とともにどのように変化するか。
- ・ 文学テキストはどのように文化的慣習を反映し、表現し、またその一部を形成するか。
- ・ 言語はどのように社会的特性やアイデンティティを表すか。

考え得る TOK とのつながり

この領域における TOK とのつながりは、文学テキストが作られた文脈がどの程度その文学テキストの意味に影響するか、また意味に関する情報を与えるか、そして、読者が文学テキストから得る知識が、受け手の文脈によってどの程度決定されるかという問いに関連します。この探究領域から発生する TOK とのつながりの例

- ・ 読者は、自分とは異なる文脈の中で書かれた文学テキストをどの程度理解することができるか。
- ・ 作品を理解できるようになるためには、作家の見解をどの程度共有する必要があるか。
- ・ 1つの言語から別の言語に翻訳される際に失われるものは何か。
- ・ 詩人、劇作家、小説家、歴史家を比較した場合、時間と空間に対するアプローチはどのように異なるか。
- ・ 文学を学習し理解するうえで、カノン（正典）の考え方は役立つか。カノンはどのように決定されるか。それらが時間とともに拡張、あるいは変化する要因にはどのようなものがあるか。

テキスト間相互関連性：テキストをつなげる

あらゆるテキストは、引用の寄せ集めであり、他のテキストを吸収したもの、または変形させたものである。

ジュリア・クリステヴァ (1980)

この探究分野では、テキスト間相互関連性、つまり多様な文学テキスト、伝統、創作者、考えの間のつながりに焦点をあてます。文学テキストの比較研究に焦点をあて、個々の文学テキストの特性と複雑な関連性についてより深く洞察します。コースを通して、多様な文学テキストの類似点と相違点に気がつきます。この領域では、教師が設定した、あるいはクラスやグループでの話し合いにより集められた一連の作品について学び、文学的問題、事例、解釈、読解について深く探ります。テキストが他のテキストに対する批判的な見方をもたらすということ、また、異なる視点をもつことで、テキストの解釈を拡大したり解釈に疑問を抱くようになり、それがテキストの解釈を助けるということに気がつきません。

「テキスト間相互関連性：テキストをつなげる」については、次のようなさまざまな方法でアプローチできます。

- ・ 同一の文学形式をもつ作品群の学習（例えば、フィクション、ノンフィクション、詩、演劇）
- ・ 上記の文学形式におけるサブカテゴリーの学習（例えば、小説、喜劇、ソネット、エッセイ）
- ・ 文学テキストを通して扱われているトピックの探究（例えば、権力、ヒロイズム、ジェンダー）
- ・ 異なるテキストがひとつの同じ概念を扱う方法についての学習（例えば、表現、アイデンティティ、文化）
- ・ ひとつの文学テキストによる他のテキストへの隠喩が、双方の意味にもたらす影響（例えば、ある作家が他の作家の作品についてテキスト間に関する明らかな言及を行っている）
- ・ 理論的な文学考察（例えば、文学の価値や批判的な観点）

この探究領域は、文学テキストが、過去と現在を通して、他の文学テキストとの関係性の中にどう存在するかを生徒に認識させることをねらいとしています。生徒は、文学的伝統と新しい方向性について、以下の概念的な問いについて考えます。

- ・ 文学テキストはどのように文学形式にまつわる伝統的方法に従っているか、あるいは逸脱しているか。
- ・ 文献引用方法や仕組みは、時代とともにどのように進化したか。
- ・ 多様な文学テキストは、どのように共通の類似点をもつことができるか。
- ・ 「古典的な」文学テキストという考え方は、どの程度妥当か。
- ・ 文学テキストは、どのようにして1つの問題、トピック、テーマについて複数の観点をもたらすことができるのか。
- ・ 比較や解釈はどのように変換されうるか。

考え得る TOK とのつながり

この領域の TOK は、作者によって意図的に行われた、あるいは受け止めるという行為により読者によって作り上げられた文学テキスト間の関わりが、テキストへの認知やテキストの意味に影響するかという問いにつながります。この探究領域から発生する TOK とのつながりの例

- ・ 文学テキストの比較対照を行ったときに、文学テキストや文学に関してどのような知識を得ることができるか。
- ・ 形式に関する規則や文学手法についての知識は、文学テキストをより効果的に、より深く理解する助けとなるか。
- ・ テキストの文学的功績についての判断はどのようにされるか。ある文学テキストが、他より優れているとみなされる要因は何か。
- ・ 文学の学習においては、時代的観点（テキストが書かれた時代ごとにグループ化する）とテーマごとのアプローチ（共通のテーマや問題ごとにグループ化する）では、どちらがより効果的か。この教科において、各テキストが知識に与える影響は何か。
- ・ 形式および時代による文学テキストの分類はどの程度有益か。文学テキストは、文学とその歴史を理解するうえでどの程度効果的か。

学習者ポートフォリオ

「言語 A：文学」のコースにおいて学習者ポートフォリオは核となる要素で、すべての生徒に必須です。これは生徒の学習を個々にまとめたもので、コースの2年間を通して集められます。

ポートフォリオ自体は IB による評価およびモデレーション（評価の適正化）の対象とはなりません。学習者ポートフォリオ用に行われた活動は、評価のための準備の基礎となるものです。コースの基盤をなし、生徒の学習のエビデンスを示し、評価要素に対する準備状況を振り返るものです。ある要素において生徒の成果物が生徒本人が取り組んだものであることを確認する、学問的誠実性の原理が守られていることを証明する、学校のシラバス実施状況を評価するなどの目的で、学習者ポートフォリオの提出が求められる場合があります。

学習者ポートフォリオは、生徒が文学テキストの探究と振り返りをする場であり、テキスト間のつながり、テキストと探究領域とのつながり、テキストと科目の主要概念とのつながりを見いだす場でもあります。生徒は対象となる探究領域で学習した作品への応答について学習者ポートフォリオで振り返ります。また、これらの作品と以前に読んだ作品を結ぶ関係性を見だし、自分とクラスメートの観点や価値観とのつながりも見いだします。シラバスが進むにつれて、これらのつながりが同じ探究領域の中、および複数の探究領域にまたがって浮き彫りになることが期待され、そのつながりがテキスト、文化、アイデンティティの間の相互作用についてのより広い知識の構築の基盤となるでしょう。

学習者ポートフォリオは生徒が評価の準備をする場でもあります。ポートフォリオを使って、学習した作品と評価要素を結ぶ最適かつ最も生産的なつながりは何かを決めます。

ポートフォリオはコースの最初に導入されるべきで、生徒の学習が進み、外部評価および内部評価の準備をするにつれてますます重要になってきます。

学習者ポートフォリオは、学習した作品に対する公式・非公式な幅広い応答を集めたものであるべきで、批判的なものや創作的なもの、さまざまな媒体を利用したものから構成されることもあります。コースを通して生徒自身の発見と進歩を記録したものが学習者ポートフォリオです。次のようなものを記録するために活用できます。

- ・ コースの考察を促す概念的問いに関連する振り返り
- ・ テキストへの応答を形づくる前提、信念、価値観への振り返り
- ・ テキストの探究と、それらによりもたらされる、実際のグローバルな社会的問題に対する知見
- ・ 作品、テキスト、抜粋の詳細な評価および批判的な分析と、それにより探究される使用言語の潜在的意味
- ・ 学習したさまざまなテキストのつながりに関する振り返り
- ・ 形式、メディア、テクノロジーを用いた試み
- ・ さまざまな文学形式を探究するため、また、生徒が作品に対して個人的な応答を発展させるための創作記述課題
- ・ 授業外で行われた読書、リサーチ、探究
- ・ 受けとった貴重なフィードバックの記録
- ・ さまざまな価値観や見解について探究したクラス活動、グループ活動、あるいはディスカッション、およびその話し合いの過程を記したレポート
- ・ 困難だった点、達成したこと
- ・ 個人口述の基礎となる、適切な抜粋を集めたもの
- ・ 生徒自身の進捗を評価するための自己評価の記録

教師は学習者ポートフォリオの指針を自由に設定し管理することができますが、生徒が自身の進歩を自由に記録できるよう、生徒なりのやり方でまとめることが推奨されます。デジタルにするか非デジタルにするか、また従来の方法かマルチモーダルにするかなど、生徒が記録するポートフォリオは個人の学習の好みによって決まります。生徒が自由に色々なオプションを選択できるようにします。

すべての評価要素を満たすために必要な成果物は、ポートフォリオの内容を発展させ取り出されたものであるようにしてください。そのため、各生徒のポートフォリオの一番最後に「学習作品フォーム」をつける必要があります。このフォームは、コースの一環として選択された作品について、また作品が評価要素とどのように関わるかについて詳しく述べるものです。

「評価」のセクションには、それぞれの評価要素に備えた学習者ポートフォリオの活用方法が提案されています。

ポートフォリオに含むことができる作品の例は、「言語 A」TSM に示されています。

学校のサポートの下で行われる自己学習（SSST）の履修生

学校のサポートの下で行われる自己学習（school-supported self-taught：SSST）の履修生が「言語A：文学」を履修できるのはSLのみです。自己学習する場合も、学校で指導されるSLの生徒と同じシラバスの要件を満たさなければなりません、すべての学習作品は、PRLから選択された作家によって書かれたものでなければならない、という例外があります。

「言語A：文学」のシラバスは非常に柔軟なため、SSSTの履修生については、学習における特定の部分において支援が必要となります。SSSTの履修生には、彼らにとっての第一言語かつ最適言語を話すチューターを割り当てなければならず、同じ学年のすべてのSSST履修生を対象とした特別授業を設定し、学校の時間割の中で実施しなければなりません。作品リストにのせるべき作品を選択するうえで必要となる情報やスキルをSSSTの履修生に与えるためにこういった対応が必要であり、それぞれの評価要素にどの作品を使用するかを決める手助けとなります。

生徒はまた、内部評価用に選択された作品に関して適切なグローバルな問題を選択するとき、それぞれの作品から抜粋を選択するとき、また個人口述をまとめるときに指導を必要とします。

SSSTの履修生のために別途用意されたリソースが、プログラム・リソース・センターで入手可能です。

言語スキルの発達

生徒は、「言語と文学」の3つのコースの全レベルで、次のような言語スキルを使い、伸ばしていきます。

受容スキル

さまざまな作品を理解、評価し、テキストの詳細に着目し、テキストの決まりについての知識をあてはめながら情報に基づいた解釈、分析、比較、評価をします。論点も考慮し、関連する詳細や説明から重要項目を見分けます。さまざまなストラテジーを使って意味を演繹し、表面的なレベルを超えた、より広い意味を把握します。

産出スキル

生徒は、さまざまなトピックについて口頭や文章で考えや意見を発表します。説明と例をあげて、複雑な論議を構築しサポートします。クラス活動の一部として、記述または実演でのテキストの変換および再創作活動に従事することにより、さまざまな形式の試みを行います。描写する、話を述べる、比較する、説明する、説得する、評価するなど幅広いコミュニケーションニーズに応じて、目的をもってまとまった長さの口頭発表を行ったり、執筆したりします。

やりとりのスキル

生徒は、口頭によるやりとりを開始し、継続させ、まとめることを通して、スタイルや強調したいことを調節する能力を示します。また、ディスカッションの流れを維持するさ

さまざまなストラテジーを用い、多様な観点や意見に意識を向けます。読者や目的を考え、ふさわしい言葉使い、語調、仕草やジェスチャーを使いわけます。生徒はまた、テキストとふれあい、多様な言語使用域やさまざまな形式において記述でのやりとりを継続できるようになります。

概念的理解

IB 資料『国際バカロレア (IB) の教育とは』において、「IB プログラムは、幅広く、バランスのとれたアカデミックな学習と学びの体験に触れる場を児童生徒に提供します。IB の概念学習では教科横断的な領域における関連性、すなわち体系化のための考えが重視されるため、学習内容を統合しカリキュラムに一貫性をもたせています（「幅広く、バランスのとれた、概念的で、関連性の高いカリキュラム」のセクション）」と記述されています。

すべての DP 言語プログラムの教科は、言語能力と言語の概念的理解は補完し合っているという学習ビジョンを推進しています。それにより生徒の学習経験全体がより強固なものとなります。したがって、DP の生徒は、人々がなぜ、どのように言語を使いコミュニケーションを図るのかについてより深く理解し、コースの内容について読む、書く、話す能力をさらに身につけます。これにより学習する言語でのコミュニケーション能力が向上します。

特に、DP の言語プログラムにおける言語の概念的理解を深めるアプローチは、以下の原理に基づいて構成されています。

- ・ IB 初等教育プログラム (PYP : Primary Years Programme) または IB 中等教育プログラム (MYP : Middle Years Programme) で学んだ経験のある DP の生徒は、言語の概念的理解 (PYP) や、MYP の「言語と文学」および「言語習得」における重要概念や関連概念への理解をさらに深める機会となります。
- ・ DP の生徒は正規の学習や個人的な体験を通して他の言語や文化について既知っていることを応用し、学習全体のプロセスをより充実させます。
- ・ また、DP の生徒は、コースにふさわしい言語と文化に関する幅広い疑問について考察し、国際的な視野を養い、自身の学習プロセスにおいてさらに自己意識を高めます。

「言語と文学」のコースにおける概念的理解

「言語と文学」のコースでは、概念が非常に大切です。3つの探究領域にまたがって作品の学習を組織的に導くものだからです。概念は3つの探究領域に多岐にわたり関連しており、1つの領域から別の領域への移行に継続性をもたらします。またテキスト間を関連づけ、学習した作品同士がどのように関係するのかを特定しやすくなります。特に評価要素に基づく評価があるわけではありませんが、概念は生徒の研究の重要な部分となり、したがって各学習作品のディスカッションでとりあげるべきです。

コースの指導と学習を形作る7つの概念は、「言語と文学」のどのコースにおいても中心的な役割を果たすことから選ばれました。これらの概念は言語と文学の学習の中核をなす

もので、注意すべき点でもあり探究の焦点にもなってきました。7つの概念の簡単な説明は以下の通りです。これらの説明は総括的なものではありませんが、コースの考え方を支える手引きとなります。

クラスの活動を通してこれらの概念にどのようにアプローチするか考え方については、本資料または「言語 A」TSM の『「言語と文学」における「指導のアプローチ」と ATL』のセクションを参照してください。

アイデンティティー

テキストを読むとき、生徒はさまざまな観点、ヴォイス（語り手や登場人物の考え方や話し方の特徴）、登場人物に出会い、関わります。テキストを読み、解釈しているときに、そこに表現される観点は作者のアイデンティティーをある程度反映するものであると仮定するのが普通です。しかし、筆者とテキストにおけるさまざまな観点やヴォイスの関係は複雑であることが多く、アイデンティティーの概念はわかりにくいものです。同じ作家による色々なテキストを読むことで浮かび上がる人物像もまた、ディスカッションを複雑にします。また逆に、テキストを読むときの読者のアイデンティティーの関わり方も、読解という行為を分析するにあたって同じくらいの重要性をもちます。

文化

文化の概念は、「言語と文学」の核をなします。文化の概念によって、テキストが、その創作と受容の文脈にどう関わるか、またテキスト中にあらわれるそれぞれの価値観、信念、態度とどう関わるかという問いが生まれます。この概念は個々のテキストと、それ以前の記述の慣習との関係性についても大切な役割を果たします。文化の概念をテキストの学習に適用することで、テキストはある特定の文化的、文学的文脈の産物であり、それらがどのように関わりあっているかという振り返りにつながります。

創造性

創造性は読む、書くという経験において重要な要素です。この概念は書くという行為、そして想像力が果たす役割を分析し理解するための基盤となります。読むという行為にあてはめた場合、創造性は、読者がテキストと想像的に関わり、そこから既存の解釈を超えた潜在的な意味を新たに生成するという重要性に気づかせてくれます。創造性はまた、独創性についての考え方や、テキストが創作され受け入れられるときに独創性がどの程度重要になるかという問いにも関わります。

コミュニケーション

コミュニケーションの概念はテキストという手段を介した作者と読者の関係性に関する問いにまつわるものです。作者が選択したスタイルや構成がコミュニケーションをどの程度円滑にするかという点は、本探究で分析する側面となりえます。作者は特定の読者を想定していることもあります。それはつまり、読者の知識や観点について作者が仮説を立てているということであり、これにより、他の人に比べ、一部の読者とのコミュニケーションが容易になることもあります。また、コミュニケーションを実現するためにテキストが

読者に求める協力の度合い、読者がコミュニケーションに関わろうとする心構えもディスカッションの重要なトピックになります。協力的な読者を得た時であっても、テキストの意味は決して一律ではありません。そのためコミュニケーションの概念は、文学テキストと非文学テキストのどちらに関しても特に生産的な概念であり、かつ問題を生じさせる可能性のある概念でもあります。

観点

テキストは複数の観点をあらかず場合があります、そこに作者の見解が反映されていることもあれば、されていないこともあります。読者もまた自分自身の観点をもってテキストと関わります。このようにさまざまな観点がテキストの解釈に影響を及ぼすため、批判的な見方とディスカッションが必要になります。読む、または書くという行為がある特定の時間と場所で起こるという事実は、テキストが創作され受け入れられた文脈がどの程度そういった観点到影響を及ぼし、形づくってきたかという新たな問いを投げかけます。

変換

テキスト間のつながりに関する学習では、3つの探究領域のうちの1つ、つまり「テキスト間相互関連性：テキストをつなげる」に焦点をあてます。テキストが互いに参照しあい、要素を充当しあい、さまざまな美的目的あるいはコミュニケーション目的に合うよう変換する複雑な方法は、テキストを創作する過程における変換の重要性を示すものです。また、読むという行為自体も、潜在的にテキストや読者に変化をもたらすものです。読者によって個人的な解釈が異なり、テキストを変換させていきます。一方、テキストもまた読者に影響を及ぼし、そこから行動へ、そして現実の変革へとつながっていく可能性もあります。

表現

言語と文学の現実との関わり方は、言語学や文学理論の研究者の間で時代を問わず大きな論争的的となってきました。作者の発言や記述をもとに、現実との関わり方についてさまざまな主張がされてきました。文学は現実をできるだけ正確に表すべきであるといった主張から、芸術は現実からも、作品の中で現実を表現すべきという義務からも完全に切り離され自由でなければならない、という主張もあります。このような議論にかかわらず、表現の概念は形式や構成が意味とどのように交わり関わるかということに関連して、本科目の中核となるものです。

コースデザインの原理

「言語A：文学」のコースでは、教師が自由にコースをまとめ、構成できるようになっています。3つの探究領域では、文学テキストの学習にあたってさまざまなアプローチに焦点をあてており、学習すべき文学形式についていかなる要件も定めていません。作品の起源についての要件（例えば、作品を原語で学習するか翻訳作品を学習するか、また作家をPRLから選ぶか自由に選択するか）については、コース全体を通して守らなくてはなりません。探究領域間でどのように要件を配分するかについては、指定の方法はありません。

また、シラバスでは探究領域を特定の評価要素に限定していないので、生徒はそれぞれの評価課題のための作品について個人的に選択する余地があります。コースデザインは自由度が高いため、細心の注意を払って計画し、シラバスに記載された教材の指導を通して要件を満たす必要があります。

多様性、統合、自律性、責任という中心的な原理は、教師がコースを構成する際の指針となり、どのように妥当かつ慎重に決定するか生徒にアドバイスをする際の手引きにもなります。

多様性

教師は必ず以下を確認してください。

- ・ 作品の選択は、可能な限りさまざまな文学形式、場所、時間、ヴォイス（作者の個性を表す特有のスタイル）を取り扱うようにする。
- ・ テクストを3つの探究領域に分類することで、それぞれの領域において、学習している言語で書かれた作品に対して、翻訳作品、異なる文学形式の作品、さまざまな時代と場所で生まれた作品を連携させ、比較・対比する十分な機会を確保する。
- ・ 選択された作品の中に、正統派のヴォイスと従来とは一線を画す新たなヴォイスとがバランスよく混在している（これにより生徒は、文学のさまざまな概念に触れ、最新の文学的発展や、それに付随する理論的な構造を意識することができる）。
- ・ 作品の選択に生徒をできる限り関わらせることで、生徒個人の好みを考慮し、なるべく好みに合わせた作品が選択されるようにする。

統合

3つの探究領域はそれぞれに独立したものではなく、選択された作品の学習への相互補完的なアプローチとなります。それぞれの領域では異なる視点を通して作品を探究しますが、教師は、文学の学習が内在的であり文脈を考慮し比較学習であることに常に言及する機会を活かし、コース全体を通じて統合していきます。

シラバスには、この3つの探究領域を統合するさまざまな方法が記載されています。

- ・ 学習者ポートフォリオにおいて、生徒は、対応する探究領域において学習した作品を振り返り、これらの作品を結ぶつながりを見いだします。シラバスの内容が進むにつれて、ひとつの探究領域内で、および複数の探究領域にまたがって、作品同士を結ぶつながりが認識されるようにします。
- ・ 個人口述や試験問題2などの評価要素は、これらの評価のために選択するオプションを考慮するにあたり、作品同士の接点について詳細に理解するよう生徒を促すものです。教師は生徒に対し、シラバスの柔軟性を有効活用し、1つの探究領域を超えて作品を選択するよう指導してください。
- ・ 生徒は、「言語と文学」のコースにおける7つの主要概念により、3つの探究領域にまたがる探究の道筋を得ることができます。

自律性

生徒が評価要素に使用する作品の選択を慎重に行うためには、自身の学習をより自律的に捉える機会が提供されなければなりません。そのためにも教師は、コースのねらい、シラバス要件、評価要素、評価規準についての情報を可能な限り早い段階で生徒に提供します。「言語と文学」のコースでは、評価要素のための作品の準備に関して、生徒に高い次元の自律性が求められます。そのような自律性を実現するには、生徒が、それぞれの探究領域と評価要素で何が求められているかを認識することが大切です。

また、生徒の最終的な目標に対して、継続的な進捗評価を実施することも重要です。評価要素の準備においては、生徒が各自で方針を設定し、それに従って進んでいきます。しかし、適切な作品を選択したかどうかの判断や、結びつける概念やグローバルな課題などに関しては、教師による指導が必要になります。自己評価および他の生徒からの評価を定期的実施することも、コースで設定された目標に対する進捗状況を評価するうえで助けとなります。

責任

「言語と文学」のコースの大きな特徴は、シラバス要件を満たす方法を選択するにあたり、教師と生徒の双方に高い自由度が与えられていることです。シラバスは規定されたものではなく、個人による選択の余地を多く残しています。

しかし教師と生徒の双方が忘れてはならないのは、コース要件の遵守状況に関しては、このような自由度が適用されないということです。教師は次のことに留意しなければなりません。

- ・ コース要件をクラス全体が満たすこと
- ・ 各生徒はすべての評価要素に要求される全項目に対応する明確な計画を有しており、この計画に従うことで、必要な作品すべての読了と学習が保証されること
- ・ 知りうる限りの範囲で、同一の作品が2つの異なる評価要素に使われることがないようにすること
- ・ 学問的誠実性が守られるようにすること

DP における評価

概要

評価は、指導と学習に必要な不可欠な要素です。DP では、カリキュラム目標の達成を支援し、生徒の適切な学習を促すことを、評価の最も重要なねらいと位置づけています。DP では、外部評価と内部評価の両方が実施されます。外部評価の評価課題は、IB の試験官が採点します。一方、内部評価の評価課題は、教師が採点し、IB によるモデレーションを受けます。

IB が規定する評価には次の 2 種類があります。

- ・ 「形成的評価」(formative assessment) は、指導と学習の両方に指針を与えます。どのような学習が行われているか、また個別の生徒にどのような強みと弱みがあるかについて、生徒と教師の双方に正確かつ有益なフィードバックをもたらすことで、生徒の理解と能力の向上に役立ちます。また、形成的評価は、コースのねらいと目的の達成に向けて生徒の進捗状況をモニターするための情報となることから、指導の質を向上させるのにも役立ちます。
- ・ 「総括的評価」(summative assessment) は、これまでの学習を踏まえて、生徒の到達度を測ることを目的としています。

DP では、主に履修期間の終了時または終了間近の生徒の到達度を測る総括的評価に重点が置かれています。ただし、評価方法の多くは、指導および学習期間中に形成的に用いることもできます。教師はそうした評価を実施するよう推奨されています。総合的な評価計画は、指導、学習およびコース編成と一体を成すものです。詳しくは IB 資料『プログラムの基準と実践要綱』を参照してください。

IB が採用する評価アプローチは、評価規準に準拠した「絶対評価」です。「相対評価」ではありません。この評価アプローチは、生徒の成果物を特定の到達レベルと照らし合わせてパフォーマンスを判断するものであり、他の生徒の成果物と比較するものではありません。DP における評価について、より詳しくは IB 資料（英語版）『Assessment principles and practices—Quality assessments in a digital age（評価の原則と実践 - デジタル時代における品質評価）』を参照してください。

プログラム・リソース・センターでは、DP の科目のコースデザイン、指導、および評価の分野で教師を支援するための多様なリソースを入手できます。また、リソースを IB ストア (store.ibo.org) で購入することもできます。試験問題の見本や対応するマークスキーム、TSM、科目レポート、評価規準の説明といったその他のリソースも、プログラム・リソース・センターで取り扱っています。過去問題や対応するマークスキームは、IB ストアで入手することができます。

評価方法

IB では、いくつかの評価方法を使用して生徒の成果物を評価します。

評価規準

評価規準は、オープンエンドの評価課題に対して使用します。それぞれの規準は、生徒が習得すべき特定のスキルに重点を置いています。生徒が何ができるかを表したのが評価目標、どの程度それができるかを表したのが評価規準です。評価規準を用いることにより、答えの違いを差別化し、多様な解答を奨励できるようになります。規準にはそれぞれ高低順に並べられた「レベルの説明」がつけられています。各レベルには、1つまたは複数の評点が含まれています。また、採点ではベストフィット（適合）モデルを用いて、各規準を個別に適用します。その規準の満点が何点になるかは規準の重要度に応じて異なる場合があります。各規準ごとの評点を合計し、その成果物の合計点を出します。

マークバンド（採点基準表）

マークバンドとは、評価する成果物に期待されるパフォーマンスの包括的な説明です。1つの規準を包括的に示し、それを複数の「レベルの説明」に分けて示します。「レベルの説明」は評点の幅に対応しており、生徒のパフォーマンスを区別できるようになっています。最も近似したレベルを選ぶベストフィットのアプローチを使用して、「レベルの説明」ごとに設けられた幅のなかから評点を選びます。

分析的マークスキーム（採点基準）

分析的マークスキームは、生徒の最終的な解答や、その他特定の種類の答案を要求する試験問題のために作成されます。各設問に対し生徒がさまざまに解答している部分に対し総合点をどのように配分するかについて、試験官に詳細な指示を与えることを目的としています。

採点の注意事項

評価規準に則って採点される評価要素のなかには、採点の注意事項があるものがあります。採点の注意事項は、問題の特定の要件に対して評価規準をどのように適用すべきかについての指針を示します。

受験上の配慮

受験上の配慮の必要な志願者に対しては、評価に際してインクルーシブな配慮をすることができます。このような配慮により、多様なニーズを抱えた生徒が試験を受け、評価対象となっている事柄について自分の知識と理解を示せるようになります。

学習支援の必要な生徒に対して提供することのできる受験上の配慮は、IB 資料『Access and Inclusion policy』（学習支援と多様な生徒の受け入れに関する方針）に詳細が記載されています。IB 資料（英語版）『Learning diversity and inclusion in IB programmes（IB プログラムにおける学習の多様性と包含性）』では、多様な学習ニーズをもって IB のプログラムを受講する生徒に関する IB の立場を説明しています。さまざまな状況から影

響を受けた生徒への対応についての詳細は、IB 資料『一般規則：ディプロマプログラム』および『ディプロマプログラム (DP) における評価の手順』を参照してください。

学校の責任

学校は、学習支援が必要な生徒に対して平等なアクセスへの配慮と妥当な調整がなされていることを確認しなければなりません。IB 資料『受験上の配慮の必要な志願者について』、(英語版)『Learning diversity and inclusion in IB programmes (IB プログラムにおける学習の多様性と包含性)』の内容が適用されます。

学習への障壁をなくし、学習へのアクセスと参加を強化するための継続的なプロセスにおいて学校を支援するために、IB 資料 (英語版)『Meeting student learning diversity in the classroom (教室における学習の多様性に対応するために)』、(英語版)『The IB guide to inclusive education: a resource for whole school development (インクルーシブな教育のための IB の手引き：全学的発展の資料)』などの文献が利用できます。

評価の概要 — SL

2021 年第 1 回試験

評価要素	配点比率
<p>外部評価 (3 時間)</p> <p>試験問題 1：設問つき文学分析 (1 時間 15 分)</p> <p>この試験問題は文学形式の異なる 2 つの課題文から成り、それぞれに 1 問ずつ設問があります。生徒は課題文の 1 つを選択し、分析を書きます。(20 点)</p>	<p>70%</p> <p>35%</p>
<p>試験問題 2：比較小論文 (1 時間 45 分)</p> <p>試験問題は、4 つの一般的な質問で構成されます。このうちの 1 問についてコースで学習した 2 つの作品に基づいて比較小論文を書きます。(30 点)</p>	<p>35%</p>
<p>内部評価</p> <p>この要素は個人口述から成り、内部評価は学校内の教師が行い、コース修了時に IB が外部モデレーションを行います。</p> <p>個人口述 (15 分)</p> <p>学習している言語で原書が書かれた 1 つの作品からの抜粋、および 1 つの翻訳作品からの抜粋を元に、生徒はあらかじめ用意した回答を 10 分間で発表し、その後 5 分間、教師から次のテーマに基づいた質問をされます。</p> <p>自分で選んだグローバルな問題が、学習した 2 つの作品の内容と形式を通してどのように表現されているか分析しなさい。(40 点)</p>	<p>30%</p>

評価の概要：SSSTの履修生 — SL

2021年第1回試験

評価要素	配点比率
<p>外部評価（3時間）</p> <p>試験問題1：設問つき文学分析（1時間15分）</p> <p>試験問題は文学形式の異なる2つの課題文から成り、それぞれに1問ずつ設問があります。課題文の1つを選択し、分析を書きます。（20点）</p>	<p>70%</p> <p>35%</p>
<p>試験問題2：比較小論文（1時間45分）</p> <p>試験問題は、4つの一般的な質問で構成されます。このうちの1問について、コースで学習した2つの作品に基づいて比較小論文を書きます。（30点）</p>	35%
<p>個人口述（SSST用）</p> <p>この要素は、IBが外部評価を行う個人口述から成ります。</p> <p>個人口述（15分）</p> <p>学習している言語で原書が書かれた1つの作品からの抜粋、および1つの翻訳作品からの抜粋を元に、生徒は次の質問に対してあらかじめ用意した回答を15分間で発表します。</p> <p>自分で選んだグローバルな問題が、学習した2つの作品の内容と形式を通してどのように表現されているか分析しなさい。（40点）</p>	30%

評価の概要 — HL

2021 年第 1 回試験

評価要素	配点比率
<p>外部評価 (4 時間)</p> <p>試験問題 1：設問つき文学分析 (2 時間 15 分)</p> <p>試験問題は文学形式の異なる 2 つの課題文から成り、それぞれに 1 問づつ設問があります。それぞれについて分析を書きます。(40 点)</p>	<p>80%</p> <p>35%</p>
<p>試験問題 2：比較小論文 (1 時間 45 分)</p> <p>試験問題は、4 つの一般的な質問で構成されます。このうちの 1 問について、コースで学習した 2 つの作品に基づいて比較小論文を書きます。(30 点)</p>	25%
<p>HL 小論文</p> <p>コースで学習した 1 つの作品について小論文を書きます。(20 点)</p> <p>小論文は、1200 語から 1500 語 (日本語の場合は 2400 字から 3000 字) です。</p>	20%
<p>内部評価</p> <p>この要素は個人口述から成り、内部評価は学校内の教師が行い、コース修了時に IB が外部モデレーションを行います。</p> <p>個人口述 (15 分)</p> <p>学習言語で原書が書かれた 1 つの作品からの抜粋、および 1 つの翻訳作品からの抜粋を元に、生徒はあらかじめ用意した回答を 10 分間で発表し、その後 5 分間、教師から次のテーマに基づいた質問をされます。</p> <p>自分で選んだグローバルな問題が、学習した 2 つの作品の内容と形式を通してどのように表現されているか分析しなさい。(40 点)</p>	20%

外部評価

すべての評価課題について生徒を評価するために、評価規準が使用されます。評価規準は本資料に記載されています。

それぞれの評価要素に対して、4つの規準があります。これらの規準は評価目標を正確に反映するために作成されました。SLとHLの共通要素に関しては、同じ規準と説明になっています。

外部評価は、SLでは最終評価の70%、HLでは80%になります。

外部評価の詳細 — SL

試験問題 1：設問つき文学分析

試験時間：1時間15分

配点比率：35%

試験問題1には、初めて読む課題文が2つ含まれています。そのうちの1つについて設問に対する分析を書きます。ここでいう「設問に対する分析」とは、課題文の技法や形式に関わる点について検討するよう求める考察を促す問いに基づいて、課題文を探究することです。課題文は、PRLに記載されている4つの文学形式のうちから出題されます。それぞれの課題文は、異なる文学形式のものです。

分析の対象となる課題文は、それ自体完結した作品である場合と、長い作品からの抜粋である場合があります。PRLに記載されている作家の作品や、授業で学習している可能性のある作品が課題文にならないよう考慮されています。

それぞれの課題文には、テキストへの興味深い切り口となり、技法または形式に関わる要素に関し、考察を促す問いが1つ与えられています。この設問への解答は必須ではありませんが、課題文の特定の部分に焦点をあてて分析を行うよう求められていることに留意しなければなりません。そのような焦点を引き出すため、テキストの中で自身が重要だと感じる技法や形式に関わる他の要素に関して、別の切り口を提案してもかまいません。

試験問題は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。試験問題1の最高点は20点です。

学習者ポートフォリオと試験問題1

学習者ポートフォリオは特に評価の対象にはなりませんが、生徒が正式な評価の準備をするための大切なツールです。生徒にとって、試験問題1で必要となるスキルを訓練し、伸ばす場になります。

試験問題1の準備に関連して、学習者ポートフォリオは生徒に次のような機会をもたらします。

- ・ 初めて読む作品の抜粋やテキストに対する応答を記録する
- ・ さまざまな文章に対する考察を促す問いを考え、その問いを通して文章を考察する
- ・ 試験問題 1 に必要なスキルのうち苦手なものを特定し、ポートフォリオを利用してそれらのスキルの向上状況を追跡する
- ・ 試験問題 1 のスキルの訓練で使われた文学形式を記録し、試験問題 1 で出題される可能性のあるすべての文学形式を学んだかどうかを確認し、それぞれの文学形式の難易度を判断する
- ・ 継続的に行っている試験問題 1 の練習の結果を一番最初のものと比較し、試験問題に対する全体的なパフォーマンスの向上状況をモニターする

試験問題 2：比較小論文

試験時間：1 時間 45 分

配点比率：35%

試験問題 2 は、4 つの一般的な設問から成り、コースで学習した 2 つの作品について比較小論文を書きます。これらの設問のうち 1 つのみに解答します。

試験問題 2 の形式と 4 つの設問は、SL と HL で共通しており、また「言語 A：文学」と「言語 A：言語と文学」でも共通です。評価規準も、上記 2 つのレベルおよび 2 つのコースで共用されます。

小論文は、試験の条件にしたがって、学習した作品を持ち込まずに書きます。選択した設問に関連づけて、学習した 2 つの作品を比較・対比します。小論文の論点が選択した設問に関連しているか、またその設問に解答するために選択した作品が適切かという点が重要となります。解答の中で該当作品について詳細に言及されているべきですが、作品からの引用を含めることは期待されていません。

オープンで柔軟性の高いコースの特性から、生徒はあらゆる学習作品を試験問題 2 で使うことができます。この試験問題への事前準備として、生徒自身で、または教師と相談しながら、学習した作品のうち 3 つをあらかじめ選択しておくことが推奨されます。これにより、試験に際して、小論文の設問とそれに解答するための 2 作品を選択することが容易となります。

いかなる状況においても、他の評価要素ですでに使用された作品を試験問題 2 で使用することはできません。これは SL と HL 両方の内部評価、および HL の小論文に関しても同様です。

試験問題は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。試験問題 2 の最高点は 30 点です。

学習者ポートフォリオと試験問題 2

学習者ポートフォリオは特に評価の対象にはなりません が、生徒が正式な評価の準備をするための大切なツールです。生徒にとって、試験問題 2 で必要となるスキルを訓練し、伸ばす場になります。

試験問題 2 の準備に関連して、学習者ポートフォリオは生徒に次のような機会をもたらします。

- ・ 学習した作品を共通のテーマや問題ごとにグループにまとめ、それらの類似点や相違点を探究する
- ・ 文学形式の違いに関する認識を養い、このような違いが 1 つのテーマや問題に対するそれぞれの作品のアプローチにどう影響するかについての認識を養う
- ・ 実際の試験問題に出題される可能性のあるさまざまな設問に解答するうえで、最も生産的な作品の組み合わせを考える
- ・ 学習した作品、コースの探究領域、コースの主要概念を結ぶつながりを探究し、作品を学習する際に使うことのできる複数の視点と、それらにより導かれる小論文の設問についての認識を深める
- ・ 継続的に行っている試験問題 2 の練習の結果を一番最初のものと比較し、試験問題に対する全体的なパフォーマンスの向上状況をモニターする

外部評価規準 SL

試験問題 1：設問つき文学分析

SL では、4 つの評価規準があります。

規準 A	理解と解釈	5 点
規準 B	分析と評価	5 点
規準 C	焦点と構成	5 点
規準 D	言語	5 点
合計		20 点

規準 A：理解と解釈

- ・ どの程度テキストに対する理解を示し、テキストに含意される意味から筋道の通った結論を導き出せているか。
- ・ テキストを参照し、どの程度考えを裏づけているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	テキストで明示されている意味についての理解をほとんど示していない。 テキストの参照はほとんど見られない、またはほとんどが適切でない。
2	テキストで明示されている意味についての理解をいくらか示している。 テキストの参照は時おり適切である。

配点	レベルの説明
3	<p>テキストで明示されている意味についての理解を示している。テキストで暗示されている意味のいくらかは十分に解釈している。</p> <p>テキストの参照はおおむね関連性があり、ほとんどが生徒の考えを裏づけている。</p>
4	<p>テキストで明示されている意味についての完全な理解を示している。テキストで暗示されている意味の多くを説得力のある方法で解釈している。</p> <p>テキストの参照は関連性があり、生徒の考えを裏づけている。</p>
5	<p>テキストで明示されている意味についての完全かつ鋭敏な理解を示している。テキストが暗に示している大意や微妙なニュアンスを説得力と洞察力のある方法で解釈している。</p> <p>テキストの参照が巧みに選択されており、生徒の考えを効果的に裏づけている。</p>

規準 B：分析と評価

- ・ テキストの特徴や作者の選択がどのように意味を形成するかについて、どの程度分析し評価しているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	説明的な解答になっている。テキストの特徴や作者の選択に関連した分析をほとんど行っていない。
2	テキストの特徴や作者の選択について適切な分析をいくらか行っているが、それらは説明的な記述に基づいたものである。
3	テキストの特徴や作者の選択について、おおむね適切な分析を行っている。
4	テキストの特徴や作者の選択について、適切かつ時おり洞察力のある分析を行っている。テキストの特徴や作者の選択がどのように意味を形成するかについて、優れた評価を行っている。
5	テキストの特徴や作者の選択について、洞察力と説得力のある分析を行っている。テキストの特徴や作者の選択がどのように意味を形成するかについて、非常に優れた評価を行っている。

規準 C：焦点と構成

- ・ 考えの提示の仕方ほどの程度まで構成され、一貫性があるか。またどこまで焦点を絞っているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	考えの提示において構成がほとんど見られない。分析の焦点として認識できるものが存在しない。
2	考えの提示においてある程度構成が見られる。分析の焦点がほとんど絞られていない。
3	考えの提示が十分に構成されており、おおむね一貫性がある。分析の焦点が多少絞られている。
4	考えの提示がうまく構成されており、大部分において一貫性がある。分析の焦点を十分に絞っている。
5	考えの提示が効果的に構成されており、一貫性がある。分析の焦点を明確に絞っている。

規準 D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確か。
- ・ 言語使用域とスタイルの選択はどの程度適切か（この文脈では、分析に適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を生徒が使用することを「言語使用域」と呼ぶ）。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、文の構造に多数の誤りがあり、言語使用域とスタイルについての意識がほとんど見られない。
2	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが時おり見られる。文法、語彙、文の構造はかなりの部分において正確だが、誤りや矛盾が明らかに存在する。言語使用域とスタイルは課題にある程度適切である。
3	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は、適度なレベルの正確さに達しているが、小さな誤りがいくらか存在する。言語使用域とスタイルは大部分において課題に適切である。

配点	レベルの説明
4	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は十分なレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に一貫して適切である。
5	非常に明確で効果的、かつ慎重に選択された正確な言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は、高いレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に対して効果的かつ適切である。

試験問題 2：比較小論文

SL では、4 つの評価規準があります。

規準 A	知識、理解、解釈	10 点
規準 B	分析と評価	10 点
規準 C	焦点と構成	5 点
規準 D	言語	5 点
合計		30 点

規準 A：知識、理解、解釈

- ・ 作品についての知識と理解をどの程度示しているか。
- ・ 作品についての知識と理解をどの程度利用して、設問で問われている類似点と相違点についての結論を引き出しているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1-2	設問に関して、作品についての知識と理解をほとんど示していない。 設問に関して、作品についての意味のある比較・対比をほとんど行っていない。
3-4	設問に関して、作品についての知識と理解を多少示している。 設問に関して、作品の比較・対比を表面的には行おうとしている。
5-6	設問に関して、作品についての十分な知識と理解を示し、作品に含意される意味についての解釈を示している。 設問に関して、作品の類似点と相違点を十分に解釈している。
7-8	設問に関して、作品についての優れた知識と理解を示し、作品に含意される意味について持続的な解釈を示している。

配点	レベルの説明
	設問に関して、作品の類似点と相違点を説得力のある方法で解釈している。
9-10	設問に関して、作品についての鋭敏な知識と理解を示し、作品に含意される意味について説得力のある解釈を示している。 設問に関して、作品の類似点と相違点を洞察力のある方法で解釈している。

規準 B：分析と評価

- ・ 言語、技法、スタイルの選択や、作者の幅広い選択がどのように意味を形成するかについて、どの程度分析し評価しているか。
- ・ 分析と評価のスキルをどの程度効果的に使用して、両方の作品を比較・対比しているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1-2	説明的な小論文になっている。テキストの特徴や作者の幅広い選択に関連のある分析をほとんど行っていない。
3-4	テキストの特徴や作者の幅広い選択について、適切な分析をいくらか行っているが、それらは説明的な記述に基づいたものである。 選択した作品に見られる作者の選択を表面的に比較・対比している。
5-6	テキストの特徴や作者の幅広い選択について、おおむね適切な分析を行っている。 選択した作品に見られる作者の選択を十分に比較・対比している。
7-8	テキストの特徴や作者の幅広い選択について、適切かつ時おり洞察力のある分析を行っている。テキストの特徴や作者の選択がどのように意味を形成するかについて、有効な評価を行っている。 選択した作品に見られる作者の選択を有効に比較・対比している。
9-10	テキストの特徴や作者の幅広い選択について、一貫して洞察力と説得力のある分析を行っている。テキストの特徴や作者の選択がどのように意味に寄与するかについて、非常に有効な評価を行っている。 選択した作品に見られる作者の選択を非常に有効に比較・対比している。

規準 C：焦点と構成

- ・ 考えを示すにあたって、どの程度うまく構成し、バランスがよいか。焦点を絞っているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	課題にほとんど焦点を絞れていない。考えと考えのつながりがほとんど存在しない。
2	課題に時おり焦点を絞れている。作品の取り上げ方はバランスがとれていない場合がある。考えの間のつながりはいくらか存在するが、必ずしも一貫性があるとはいえない。
3	課題への焦点を保っているが、ところどころに欠けている。作品の取り上げ方は大部分においてバランスがとれている。考えを発展させる過程は大部分において論理的である。全体的に一貫性のある方法で考えを結びつけている。
4	課題への焦点を大部分において明確にし持続させている。作品の取り上げ方は、バランスがとれている。考えを発展させる過程に一貫性があり論理的である。一貫性のある方法で考えを結びつけている。
5	課題への焦点を明確にし持続させている。作品の取り上げ方はバランスがうまくとれている。考えを発展させる過程は論理的で説得力がある。説得力のある方法で考えを結びつけている。

規準 D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確か。
- ・ 言語使用域とスタイルの選択はどの程度適切か（この文脈では、小論文に適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を生徒が使用することを「言語使用域」と呼ぶ）。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、文の構造に多数の誤りがあり、言語使用域やスタイルについての意識がほとんど見られない。
2	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが時おり見られる。文法、語彙、文の構造はかなりの部分において正確だが、誤りや矛盾が明らかに存在する。言語使用域とスタイルは課題にある程度適切である。

配点	レベルの説明
3	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は適度なレベルの正確さに達しているが、小さな誤りが多少存在する。言語使用域とスタイルは大部分において課題に適切である。
4	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は十分なレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に一貫して適切である。
5	非常に明確で効果的、かつ慎重に選択された正確な言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は、高いレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に対して効果的かつ適切である。

外部評価の詳細：SSST — SL

SSST の履修生が作成する評価課題は、すべて外部評価の対象となります。

試験問題 1 と 2 は、学校で授業を受講している生徒の試験問題と同様のものになります。各評価要素の配点、評価規準および採点についても学校で授業を受講している生徒の場合と同様です。

個人口述（SSST 用）は外部評価されます。

個人口述（SSST 用）

SSST 履修生向けの個人口述の準備と基本的な手順は、学校で授業を受講している生徒の場合と同様です。ただし、SSST 履修生の口述評価では、教師が質問することはありません。その分の時間は、SSST 履修生が個人口述を作成する時間に充てられます。したがって、この要素は履修生による 15 分の個人口述のみで構成されます。

外部評価の詳細 — HL

試験問題 1：設問つき文学分析

試験時間：2 時間 15 分

配点比率：35%

試験問題 1 には、初めて読む課題文が 2 つ含まれており、それぞれについて個別に設問に対する分析を書くよう指示されます。ここでいう「設問に対する分析」とは、課題文の技法や形式に関わる点について検討するよう求める考察を促す問いに基づいて、課題文を探究することです。課題文は、PRL に記載されている 4 つの文学形式のうち、どの形式から選択してもかまいません。それぞれの課題文は、異なる文学形式から出題されます。

分析の対象となる課題文は、それ自体完結した作品である場合と、長い作品からの抜粋である場合があります。PRL に記載されている作家の作品や、授業で学習している可能性のある作品が課題文にならないよう考慮されています。

それぞれの課題文には、技法または形式に関わる重要な要素に関し、考察を促す問いが1つ与えられています。その要素はテキストへの興味深い切り口となるでしょう。この設問への解答は必須ではありませんが、課題文の特定の部分に焦点をあてて分析を行うよう求められていることに留意しなければなりません。そのような焦点を引き出すため、テキストの中で自身が重要だと感じる技法や形式に関わる他の要素に関して、別の切り口を提案してもかまいません。

評価規準はSLとHLで共通のものを使用します。配点は各問20点です。試験問題1の最高点は40点です。

学習者ポートフォリオと試験問題1

学習者ポートフォリオは特別に評価されませんが、生徒が正式な評価の準備をするための大切なツールです。生徒にとって、試験問題1で必要となるスキルを訓練し、伸ばす場になります。

試験問題1の準備に関連して、学習者ポートフォリオは生徒に次のような機会をもたらします。

- ・ 初めて読む作品の抜粋やテキストに対する応答を記録する
- ・ さまざまな文章に対する考察を促す問いを考え、その問いを通して文章にアプローチする
- ・ 試験問題1に必要なスキルのうち苦手なものを特定し、ポートフォリオを利用してそれらのスキルの向上状況を追跡する
- ・ 試験問題1のスキルの練習で使われた文学形式を記録し、試験問題1で出題される可能性のあるすべての形式を学んだかどうかを確認し、それぞれの形式の難易度を判断する
- ・ 継続的に行っている試験問題1の練習の結果を一番最初のものと比較し、試験問題に対する全体的なパフォーマンスの向上状況をモニターする

試験問題2：比較小論文

試験時間：1時間45分

配点比重：25%

試験問題2は、4つの一般的な設問から成り、コースで学習した2つの作品について比較小論文を書きます。生徒は、これらの設問のうち1つのみに解答します。

試験問題2の形式と4つの設問は、SLとHLで共通しており、また「言語A：文学」と「言語A：言語と文学」でも共通です。評価規準も、上記2つのレベルおよび2つのコースで共用されます。

小論文は、試験の条件にしたがって、学習した作品を持ち込まずに書きます。選択した設問に関連づけて、学習した2つの作品を比較・対比します。小論文の論点が選択した設問に関連しているか、またその設問に解答するために選択した作品が適切かという点が重要となります。解答の中で該当作品について詳細に言及されているべきですが、作品からの引用を含めることは期待されていません。

オープンで柔軟性の高いコースの特性から、生徒はあらゆる学習作品を試験問題 2 で使うことができます。この試験問題への事前準備として、生徒自身で、または教師と相談しながら、学習した作品のうち 3 つをあらかじめ選択しておくことが推奨されます。これにより、試験に際して、小論文の設問とそれに解答するための 2 作品を選択することが容易となります。

いかなる状況においても、他の評価要素ですでに使用された作品を試験問題 2 で使用することはできません。これは SL と HL 両方の内部評価、および HL の小論文に関しても同様です。

試験問題は、本資料に記載された評価規準に則って評価されます。試験問題 2 の最高点は 30 点です。

学習者ポートフォリオと試験問題 2

学習者ポートフォリオは特に評価の対象にはなりません、生徒が正式な評価の準備をするための大切なツールです。生徒にとって、試験問題 2 で必要となるスキルを訓練し、伸ばす場になります。

試験問題 2 の準備に関連して、学習者ポートフォリオは生徒に次のような機会をもたらします。

- ・ 学習した作品を共通のテーマや問題ごとにグループにまとめ、それらの類似点や相違点を探究する
- ・ 文学形式の違いに関する認識を養い、このような違いが 1 つのテーマや問題に対するそれぞれの作品のアプローチにどう影響するかについての認識を養う
- ・ 実際の試験問題に出題される可能性のあるさまざまな設問に解答するうえで、最も生産的な作品の組み合わせを考える
- ・ 学習した作品、コースの探究領域、コースの主要概念を結ぶつながりを探究し、作品を学習する際に使うことのできる複数の視点と、それらにより導かれる小論文の設問についての認識を深める
- ・ 継続的に行っている試験問題 2 の練習の結果を一番最初のものと比較し、試験問題に対する全体的なパフォーマンスの向上状況をモニターする

HL 小論文

配点比率：20%

課題の性質

HL では、授業で学習した作品に関連し自分で選択した探究の道筋について、1200 から 1500 語（日本語の場合は 2400 字から 3000 字）の正式な小論文を書きます。

HL の小論文は、文学のトピックを長期間にわたり研究し、計画、下書き、修正を行う過程を通して自らの考えに磨きをかけることにより、他者に依存せず批判的で創造的な読者、考える人、そして作者となる機会を生徒に与えます。この小論文で、焦点を絞った分析的主張をし、広く文学的観点から作品を探究します。また、引用や文献参照を行うなど学術的小論文の正式な枠組みに従うことが求められます。

課題の説明

HL 小論文は学習者ポートフォリオで行ってきた探究に基づくものです。この探究の過程で、さまざまな観点から多くの作品について研究します。小論文の下書きに入る前の準備段階で、どの作品に焦点をあてて探究を深めるか、そしてその作品に関連してどのトピックについて書くかを決定します。トピックを決めるにあたり、コースの指針となる7つの主要概念と照らし合わせることもできます。クラスですでに学習した作品を選択することはできますが、内部評価で使った作品と試験問題2で使用する予定の作品は選択できません。

作品の選択

小論文のための作品とトピックを自ら選択しなければなりません。この過程において教師と相談することが非常に重要です。文学テキストや作品を選択する際は、きちんと膨らみがあり、焦点の絞られた、分析的な議論を可能にするため、内容に十分な深みのあるものを選択するよう留意してください。

短編集、詩集、歌の歌詞集や、その他短い文学テキストの場合は、その作品の中から焦点となる1つの文学テキストを選択することもできます。ただし、生徒も教師も、この評価が狭義のスタイルの評論ではなく、広義の文学研究であることを忘れてはなりません。そのため、作品から複数の文学テキストを使用する必要性が出てくる場合もあります。この場合生徒は、その作品の作家による、授業で学習していないテキストを探究することもできます。ただしこれは、かかるテキストのうち少なくともひとつを授業で取り扱っていることを前提とします。

トピックの決定

選択したトピックは、小論文に広く文学的焦点をあてたものでなければなりません。これを実践するにあたり、小論文のトピックを考え出したり決定したりする出発点として、コースの7つの主要概念が役立ちます。この7つの概念のどれかに小論文を結びつける必要はなく、評価規準でも求められていませんが、7つの概念のいずれかを念頭に置くことで考えや論点をまとめながらトピックを考えるきっかけになります。ここで7つの概念を課題に関連させながら簡単に紹介します。さらに詳しい具体例は「言語A」TSMに示されています。

アイデンティティー

作品中の特定の登場人物または登場人物のグループのアイデンティティーがどのように表現されているか、また作品が作者のアイデンティティーにどのように関わるかについて関心をもつ。

文化

ある特定の場所、組織、グループの文化がどのように表現されているか、あるいは作品自体が特定の文化にどのように関わっているかに関心をもつ。

創造性

個人あるいは集団の創造性、あるいは創造性の欠如が作品中でどのように表現されているかについて、また作品が作者の創造性をどのように表現するかについて関心をもつ。

コミュニケーション

コミュニケーションという行為、あるいはミスコミュニケーションが作品の中でどのように表現されているか、また作品自体がコミュニケーションという行為をどのように表現しているかについて関心をもつ。

変換

変換または変換という行為が作品の中でどのように表現されているか、また作品自体が他の作品から変換され（テキスト間の言及を通して）、あるいは現実から変換される（読者のアイデンティティ、関係性、目標、価値観、信念への変換的影響を通して）ことに関心をもつ。

観点

作品の中に登場するある特定の観点や複数の観点、作品自体が作者の観点をどのように表現しているかについて関心をもつ。

表現

作品自体がさまざまなテーマや態度、概念を表現する方法、または文学が実際に現実をどこまで表現できるかについて関心をもつ。

学習者ポートフォリオと HL 小論文

学習者ポートフォリオは特別に評価されませんが、生徒が正式な評価の準備をするための大切なツールです。生徒が作品を学習する際に自立した思考を育むための土台となり、作品への応答が文化的価値、アイデンティティ、関係性、さまざまなトピックにまたがる問題を探る方法について振り返るものです。

HL 小論文の準備に関連して、学習者ポートフォリオは生徒に次のような機会をもたらします。

- ・ 今までに読んだ各作品が、コースの7つの主要概念にどう関わるかについて振り返る
- ・ 今までに読んだそれぞれの作品に関するテーマや問題について記録する
- ・ 学習した作品の鍵となるテキストが、作品のテーマや問題においてどの程度の重要性をもつかを探究する
- ・ 選択したトピックと関わる思考や計画の発展をたどる
- ・ 小論文で使用したい参照先や、考え、引用文、二次文献を記録する
- ・ HL 小論文に取り組むにあたり、学習者として個人的に難しかった部分について振り返る

指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

教師は、トピックの選択から論文の提出まで、HL 小論文の作成過程全体を通して生徒を指導します。執筆途中ではモニタリングとアドバイスを行い、計画にフィードバックを

し、それぞれ期限を設定し生徒が計画通り進行するように支援します。この過程の始めの部分で生徒を支援し導くことの大切さはいうまでもありません。

また同時に、生徒の自律性も大事です。教師は作品やトピックに関して指示してはなりません。アイデアが適切かどうかアドバイスをしたり、明確にするために生徒に質問したり、探究ができる方向性を示唆したり、アプローチの軌道修正をしたりします。

教師は評価用に提出する前に、小論文が生徒自身の作品であることを確認し、学問的誠実性に関するあらゆる懸念を解消してください。学問的誠実性が重要であること、特に作品は自分のものでなければならず、他者のアイデアはきちんと明記しなければならないことを、教師の責任において生徒に確実に理解させてください。外部評価されるこの小論文が、すべて生徒自身の作品でなければならぬことを確実に理解させてください。

教師は生徒の作品に対して定期的にフィードバックをしますが、直接編集したり訂正したりしてはなりません。生徒の執筆が終盤にさしかかったら、教師は、作品をどう改善できるかについて、最初の草稿にアドバイスをすることができます。草稿の余白にコメントを記入するなどしてください。これらのコメントを質問やプロンプト（発問）の形にすることで、さらなる振り返りや改善をもたらすことができます。いかなる場合にも、教師が草稿を編集したり書き直したりしてはなりません。この最初の草稿の次に提出されるのが最終稿となります。

生徒は作品のより広い議論を支えるため参考資料を使い、主要な参照先を詳しく記さなければなりません。二次文献の使用は必須ではありません。使用した参考文献は適切に引用先を明記しなければなりません。小論文は生徒自身の作品で、IBの学問的誠実性のポリシーにのっとったものでなければなりません。

HL小論文と教師の役割についての詳しいガイドラインは、「言語A」TSMを参考にしてください。

外部評価規準 — HL

すべての評価課題について生徒を評価するために、評価規準が使用されます。評価規準は本資料に記載されています。すべての共通要素において、SLとHLの評価規準は同じです。

HLにおける外部評価規準の概要は以下のとおりです。

試験問題 1：設問つき文学分析

HLでは、以下の4つの評価規準があり、それぞれの答えに対し個別に適用されます。

規準 A	理解と解釈	5 点
規準 B	分析と評価	5 点
規準 C	焦点と構成	5 点
規準 D	言語	5 点
合計		20 点

規準 A：理解と解釈

- ・ どの程度テキストに対する理解を示し、テキストに含意される意味から筋道の通った結論を導き出せているか。
- ・ テキストを参照し、どの程度考えを裏づけているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	テキストで明示されている意味についての理解をほとんど示していない。 テキストの参照はほとんど見られない、またはほとんどが適切でない。
2	テキストで明示されている意味についての理解をいくらか示している。 テキストの参照は時おり適切である。
3	テキストで明示されている意味についての理解を示している。テキストで暗示されている意味のいくらかは十分に解釈している。 テキストの参照はおおむね関連性があり、ほとんどが生徒の考えを裏づけている。
4	テキストで明示されている意味についての完全な理解を示している。テキストで暗示されている意味の多くを説得力のある方法で解釈している。 テキストの参照は関連性があり、生徒の考えを裏づけている。
5	テキストで明示されている意味についての完全かつ鋭敏な理解を示している。テキストが暗に示している大意や微妙なニュアンスを説得力と洞察力のある方法で解釈している。 テキストの参照が巧みに選択されており、生徒の考えを効果的に裏づけている。

規準 B：分析と評価

- ・ テキストの特徴や作者の選択がどのように意味を形成するかについて、どの程度分析し評価しているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	説明的な解答になっている。テキストの特徴や作者の選択に関連した分析をほとんど行っていない。

配点	レベルの説明
2	テキストの特徴や作者の選択について適切な分析をいくらか行っているが、それらは説明的な記述に基づいたものである。
3	テキストの特徴や作者の選択について、おおむね適切な分析を行っている。
4	テキストの特徴や作者の選択について、適切かつ時おり洞察力のある分析を行っている。テキストの特徴や作者の選択がどのように意味を形成するかについて、良い評価を行っている。
5	テキストの特徴や作者の選択について、洞察力と説得力のある分析を行っている。テキストの特徴や作者の選択がどのように意味を形成するかについて、非常に有効な評価を行っている。

規準 C：焦点と構成

- ・ 考えの提示の仕方はどの程度効果的に構成され、一貫性があるか。またどこまで焦点を絞っているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	考えの提示において構成がほとんど見られない。分析の焦点として認識できるものが存在しない。
2	考えの提示においてある程度構成が見られる。分析の焦点がほとんど絞られていない。
3	考えの提示が十分に構成されており、おおむね一貫性がある。分析の焦点が多少絞られている。
4	考えの提示がうまく構成されており、大部分において一貫性がある。分析の焦点を十分に絞っている。
5	考えの提示が効果的に構成されており、一貫性がある。分析の焦点を明確に絞っている。

規準 D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確か。
- ・ 言語使用域とスタイルの選択はどの程度適切か（この文脈では、分析に適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を生徒が使用することを「言語使用域」と呼ぶ）。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、文の構造に多数の誤りがあり、言語使用域とスタイルについての意識がほとんど見られない。
2	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが時おり見られる。文法、語彙、文の構造はかなりの部分において正確だが、誤りや矛盾が明らかに存在する。言語使用域とスタイルは課題にある程度適切である。
3	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は、適度なレベルの正確さに達しているが、小さな誤りがいくらか存在する。言語使用域とスタイルは大部分において課題に適切である。
4	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は十分なレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に一貫して適切である。
5	非常に明確で効果的、かつ慎重に選択された正確な言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は、高いレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に対して効果的かつ適切である。

試験問題 2：比較小論文

HL では、以下の 4 つの評価規準があります。

規準 A	知識、理解、解釈	10 点
規準 B	分析と評価	10 点
規準 C	焦点と構成	5 点
規準 D	言語	5 点
合計		30 点

規準 A：知識、理解、解釈

- ・ 作品についての知識と理解をどの程度示しているか。
- ・ 作品についての知識と理解をどの程度利用して、設問で問われている類似点と相違点についての結論を引き出しているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。

配点	レベルの説明
1-2	設問に関して、作品についての知識と理解をほとんど示していない。 設問に関して、作品についての意味のある比較・対比をほとんど行っていない。
3-4	設問に関して、作品についての知識と理解を多少示している。 設問に関して、作品の比較・対比を表面的には行おうとしている。
5-6	設問に関して、作品についての十分な知識と理解を示し、作品に含意される意味についての解釈を示している。 設問に関して、作品の類似点と相違点を十分に解釈している。
7-8	設問に関して、作品についての優れた知識と理解を示し、作品に含意される意味について持続的な解釈を示している。 設問に関して、作品の類似点と相違点を説得力のある方法で解釈している。
9-10	設問に関して、作品についての鋭敏な知識と理解を示し、作品に含意される意味について説得力のある解釈を示している。 設問に関して、作品の類似点と相違点を洞察力のある方法で解釈している。

規準 B：分析と評価

- ・ 言語、技法、スタイルの選択や、作者の幅広い選択がどのように意味を形成するかについて、どの程度分析し評価しているか。
- ・ 分析と評価のスキルをどの程度効果的に使用して、両方の作品を比較・対比しているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1-2	説明的な小論文になっている。テキストの特徴や作者の幅広い選択に関連のある分析をほとんど行っていない。
3-4	テキストの特徴や作者の幅広い選択について、適切な分析をいくらか行っているが、それらは説明的な記述に基づいたものである。 選択した作品に見られる作者の選択を表面的に比較・対比している。
5-6	テキストの特徴や作者の幅広い選択について、おおむね適切な分析を行っている。 選択した作品に見られる作者の選択を十分に比較・対比している。

配点	レベルの説明
7-8	<p>テキストの特徴や作者の幅広い選択について、適切かつ時おり洞察力のある分析を行っている。テキストの特徴や作者の選択がどのように意味を形成するかについて、有効な評価を行っている。</p> <p>選択した作品に見られる作者の選択を有効に比較・対比している。</p>
9-10	<p>テキストの特徴や作者の幅広い選択について、一貫して洞察力と説得力のある分析を行っている。テキストの特徴や作者の選択がどのように意味に寄与するかについて、非常に有効な評価を行っている。</p> <p>選択した作品に見られる作者の選択を非常に有効に比較・対比している。</p>

規準 C：焦点と構成

- ・ 考えを示すにあたって、どの程度うまく構成し、バランスがよいか。焦点を絞っているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	課題にほとんど焦点を絞れていない。考えと考えのつながりがほとんど存在しない。
2	課題に時おり焦点を絞れている。作品の取り上げ方はバランスがとれていない場合がある。考えの間のつながりはいくらか存在するが、必ずしも一貫性があるとはいえない。
3	課題への焦点を保っているが、ところどころに欠けている。作品の取り上げ方は大部分においてバランスがとれている。考えを発展させる過程は大部分において論理的である。全体的に一貫性のある方法で考えを結びつけている。
4	課題への焦点を大部分において明確にし持続させている。作品の取り上げ方は、バランスがとれている。考えを発展させる過程は論理的である。一貫性のある方法で考えを結びつけている。
5	課題への焦点を明確にし持続させている。作品の取り上げ方はバランスがうまくとれている。考えを発展させる過程は論理的で説得力がある。説得力のある方法で考えを結びつけている。

規準 D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確か。
- ・ 言語使用域とスタイルの選択はどの程度適切か（この文脈では、小論文に適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を生徒が使用することを「言語使用域」と呼ぶ）。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、文の構造に多数の誤りがあり、言語使用域とスタイルについての意識がほとんど見られない。
2	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが時おり見られる。文法、語彙、文の構造はかなりの部分において正確だが、誤りや矛盾が明らかに存在する。言語使用域とスタイルは課題にある程度適切である。
3	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は適度なレベルの正確さに達しているが、小さな誤りが多少存在する。言語使用域とスタイルは大部分において課題に適切である。
4	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は十分なレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に一貫して適切である。
5	非常に明確で効果的、かつ慎重に選択された正確な言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は、高いレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に対して効果的かつ適切である。

HL 小論文

4つの評価規準があります。

規準 A	知識、理解、解釈	5点
規準 B	分析と評価	5点
規準 C	焦点、構成、展開	5点
規準 D	言語	5点
合計		20点

規準 A：知識、理解、解釈

- ・ 選択した作品やテキストについての知識と理解をどの程度示しているか。
- ・ 作品やテキストについての知識と理解をどの程度使用して、選択したトピックに関する結論を引き出しているか。
- ・ 作品やテキストを参照し、選択したトピックに関する考えをどの程度裏づけているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	選択したトピックに関して、作品やテキストについての知識と理解をほとんど示していない。 作品やテキストへの参照が少ない、または選択したトピックに対してほとんどが適切ではない。
2	選択したトピックに関して、作品やテキストについての知識と理解がある程度示されている。 作品やテキストの参照は選択したトピックに時おり適切である。
3	選択したトピックに関して、作品やテキストについての十分な知識と理解、および作品やテキストに含意される意味についての解釈を示している。 作品やテキストの参照は、選択したトピックにおおむね関連性があり、ほとんどが生徒の考えを裏づけている。
4	選択したトピックに関して、作品やテキストについての優れた知識と理解、および作品やテキストに含意される意味についての継続的な解釈を示している。 作品やテキストの参照は、選択したトピックに関連性があり、生徒の考えを裏づけている。
5	選択したトピックに関して、作品やテキストについての非常に優れた知識と理解、および作品やテキストに含意される意味についての説得力のある解釈を示している。 作品やテキストの参照は巧みに選択されており、選択したトピックに関して生徒の考えを効果的に裏づけている。

規準 B：分析と評価

- ・ 言語・技法・スタイルの選択および作者の幅広い選択が選択したトピックに関してどのように意味を形成するかについて、どの程度分析し評価しているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	説明的な小論文になっている。テキストの特徴と作者の幅広い選択について、選択したトピックに関連のある分析をほとんど行っていない。
2	テキストの特徴と作者の幅広い選択について、選択したトピックに対して適切な分析をいくらか行っているが、それらは説明的な記述に基づいたものである。
3	テキストの特徴と作者の幅広い選択について、選択したトピックに対しておおむね適切な分析と評価を行っている。
4	テキストの特徴と作者の幅広い選択について、選択したトピックに対して適切かつ時おり洞察力のある分析と評価を行っている。
5	テキストの特徴と作者の幅広い選択について、選択したトピックに対して洞察力と説得力のある分析と評価を一貫して行っている。

規準 C：焦点、構成、展開

- ・ 小論文で考えを提示するにあたり、どの程度うまく構成し、焦点を絞り、議論を展開させているか。
- ・ 事例をどの程度効果的に小論文に統合させているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	構成がほとんど見られない。探究の道筋として認識できるものが存在しない。 議論を支えるための事例を文や段落の構造に統合していない。
2	構成がいくらか見られる。探究の道筋をほとんど展開させていない。 議論を支えるための事例を文や段落の構造にほとんど統合していない。
3	小論文を十分に構成していて、全体としては一貫性がある。探究の道筋をいくらか展開させている。 議論を支えるための事例を文や段落の構造に時おり統合している。
4	小論文をうまく構成していて、ほぼ一貫性がある。探究の道筋を十分に展開させている。 議論を支えるための事例を大部分において文や段落の構造にうまく統合している。
5	小論文を効果的に構成していて、一貫性がある。探究の道筋をうまく展開させている。

配点	レベルの説明
	議論を支えるための事例を文や段落の構造にうまく統合している。

規準 D：言語

- ・ 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確か。
- ・ 言語使用域とスタイルの選択はどの程度適切か（この文脈では、HL 小論文に適切な語彙、語調、構文、専門用語などの要素を生徒が使用することを「言語使用域」と呼ぶ）。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1	明確かつ適切な言葉遣いがほとんど見られない。文法、語彙、文の構造に多数の誤りがあり、言語使用域とスタイルについての意識がほとんど見られない。
2	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが時おり見られる。文法、語彙、文の構造はかなりの部分において正確だが、誤りや矛盾が明らかに存在する。言語使用域とスタイルは課題にある程度適切である。
3	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は適度なレベルの正確さに達しているが、小さな誤りが多少存在する。言語使用域とスタイルは大部分において課題に適切である。
4	明確かつ慎重に選択された言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は十分なレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に一貫して適切である。
5	非常に明確で効果的、かつ慎重に選択された正確な言葉遣いが見られる。文法、語彙、文の構造は、高いレベルの正確さに達している。言語使用域とスタイルは課題に対して効果的かつ適切である。

内部評価

内部評価の目的

内部評価はコースを構成する不可欠な要素であり、SL、HL のいずれの生徒にとっても必須です。内部評価課題では、筆記試験のように制約に左右されることなく、それぞれの興味を追い求めつつ、知識とスキルの活用を異なる状況で示すことができます。

内部評価を構成する課題は、個人口述という形式をとります。SL と HL 両方の生徒は、グローバルな問題に関する観点がどのように表現されているか分析するため、プロンプトに答える形で個人口述をします。2つの異なる作品からの2つの抜粋を使いますが、うち1つは学習している言語で書かれた原書、もう1つは翻訳作品である必要があります。

内部評価は、できるかぎり通常授業の指導に組み込まれるべきです。このため内部評価は、グローバルな問題がどのように表現されているかについて、生徒が学習者ポートフォリオの中で自らの学習、分析、探究を振り返ることにかかっています。

指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

内部評価のために提出される個人口述は、生徒自身が取り組んだものでなければなりません。ただし、教師からの支援を受けずに生徒がトピックを決め、内部評価の課題に取り組むという意味ではありません。生徒が内部評価課題を計画する段階と、実際に取り組む段階で、教師は重要な役割を果たします。教師は、責任をもって、以下の項目を生徒にしっかりと理解させるようにしてください。

- ・ 個人口述の要件
- ・ 学問的誠実性の基準
- ・ 評価規準

教師と生徒は、内部評価課題について話し合わなければなりません。率先して教師に相談し、アドバイスや情報を得るよう、教師は生徒に働きかけてください。また、生徒が指導を求めたことで減点してはなりません。学習プロセスの一環として、教師は、個人口述の準備に最善の方法をアドバイスすべきです。これには、生徒自らが選んだグローバルな問題に取り組むうえで焦点となる2つの作品をどう選択するか、また、選択したグローバルな問題が2つの作品に対して適切かどうか、などが含まれます。生徒が内部評価に使用するものとは別の作品やグローバルな問題を使って、個人口述の練習をすることもできます。これらの練習に基づき、評価規準を満たすためにさらなる改善が必要な箇所についてフィードバックを与えます。口述の準備が終盤に差し掛かってきたら、生徒が準備したアウトラインについてフィードバックを与えることはできますが、生徒と実際の口述のリハーサルをすることはできません。

教師には、学問的誠実性に関連する概念、特に課題が本当に生徒本人が取り組んだものであること、および知的財産についての基本的な意味と重要性をすべての生徒に確実に理

解させる責任があります。教師は必ず、すべての評価課題が要件に沿って取り組まれていることを確認しなければなりません。また、内部評価課題が完全に生徒自身によるものでなければならないことを生徒に対して明確に説明しなければなりません。

モデレーションや評価のために IB に提出されるすべての学習成果物は教師により認証されたものでなければなりません。また学問的不正行為の疑いがあるものや、不正行為が確認されたいかなる成果物も提出してはなりません。生徒はそれぞれ、学習成果物が自分自身のものであることを正式に認める必要があります。学校が指定する時期に口述が実施されたら、やり直すことはできません。また一度提出された口述を撤回することはできません。生徒本人が取り組んだものであることの確認は、モデレーションのために IB に提出するサンプルの成果物だけでなく、すべての生徒の成果物に必要です。詳細は、IB 資料『Academic honesty in the IB educational context (IB 教育の文脈における学問的誠実性)』『DP：原則から実践へ』、『一般規則：ディプロマプログラム』の関連セクションを参照してください。

生徒本人が取り組んだものであるかどうかは、生徒と課題の内容について話し合うことに加え、次の項目のうち1つまたは複数について精査することによって確認します。

- ・ 生徒の最初の案
- ・ 生徒の通常の成果物の質

内部評価と EE の両方の要件を満たすために、同一の成果物を重複して提出することはできません。内部評価に使用される作品は、他の評価要素で使用されたものと異なるものでなければなりません。

時間配分

内部評価は、SL では最終評価の 30%、HL では 20%を占めます。この配点比率は、評価に取り組むのに必要な知識、スキル、および理解力を指導する授業時間、ならびに口述を実施する時間にも反映されなければなりません。

個人口述の実施においては以下の時間が必要です。

- ・ 教師が生徒に内部評価の要件を説明する時間
- ・ 学問的誠実性の書類を見直す時間
- ・ 生徒が内部評価の課題に取り組み、質問をする時間
- ・ 教師と生徒が話し合う時間
- ・ 進捗状況を振り返り、モニターし、生徒本人が取り組んだ成果物であることを確認する時間
- ・ 口述を実施し、すべての書類を提出する時間

要件および推奨事項

個人口述は必ず「言語 A」の学習している言語で行われなければなりません。個人口述の手順と特性、ならびに生徒と教師の口頭でのやりとりについては、コースの中で練習を重ねるべきものです。ただし、生徒は個人口述を暗記するべきではありません。暗記をすると話者と聞き手の間に距離ができ、効果的で説得力のある口述にはなりません。

各生徒の個人口述を録音してください。ファイルは質の高いものにしてください。録音はIB資料『ディプロマプログラム（DP）における評価の手順』に定められた方法で保存します。モデレーションのために選ばれた内部評価のサンプルは、音声ファイルとして提出しなければなりません。

内部評価への評価規準の適用

内部評価には、多くの評価規準が設けられています。各評価規準には、到達レベルを説明する「レベルの説明」と、それに対応する点数が示されています。「レベルの説明」では、達成できた成果に注目しますが、到達度の低いレベルでは、最低要件を達成できなかったという記述が含まれていることもあります。

教師がSLおよびHLの内部評価課題を採点する際は、評価規準の「レベルの説明」に照らし合わせて判断します。

- ・ 評価規準は、SLとHLに共通です。
- ・ ベストフィットモデルの考え方にに基づき、「レベルの説明」から、生徒の到達レベルを最も適切に示す説明を見つけます。学習成果物に見られる到達度が複数のレベルの複数の要素にあてはまる場合は調整する、というのがベストフィットアプローチの考え方です。与えられる点数は、規準に照らし合わせた場合に、到達レベルのバランスをもっとも公正に反映するものでなければなりません。「レベルの説明」に記載されたすべての点を満たしていなくても、その評点を与えることができます。
- ・ 生徒の学習成果物を評価する際、教師は、各規準の「レベルの説明」を順番に読んでいき、その成果物のレベルを最も適切に表している説明に行きあたるまで読み進みます。成果物が2つのレベルの間にあると思われる場合は、その2つの「レベルの説明」をもう一度読み直し、適切な方を選びます。
- ・ 1つのレベル内に2つの評点の可能性が与えられている場合は、成果物がその「レベルの説明」に含まれている特徴を広く満たしており、もうひとつ上のレベルに近い到達度であれば、高いほうの評点を付与します。成果物がその「レベルの説明」に含まれている特徴をあまり満たしておらず、もうひとつ下のレベルに近い到達度である場合は、低いほうの評点を付与します。
- ・ 評点は整数のみを使用します。部分点（分数や小数）を用いた点数は認められません。
- ・ 教師は合格・不合格の線引きをするような考え方をせずに、各評価規準において、学習成果物を最も適切に表すレベルを判別することに専念してください。
- ・ 「レベルの説明」にある最上位レベルは、欠点のない完璧な学習成果を意味するものではありません。「言語A：文学」の生徒であれば達成可能なレベルです。成果物が最上位の「レベルの説明」にあてはまるのであれば、躊躇せず最高点をつけるべきです。
- ・ ある規準で高いレベルに到達した生徒が、他の規準でも高いレベルに到達するとはかぎりません。同様に、ある規準で到達レベルの低かった生徒が、他の規準でも到

達レベルが低いとはかぎりません。生徒の全体的な評価をもとにある特定の点数をその生徒の得点として想定してはなりません。

- ・ 教師は、生徒に評価規準を公開し、規準について確実に理解させます。

内部評価の詳細 — SL・HL

個人口述

所要時間：15分（生徒による口述：10分、教師からの質問：5分）

配点比率：SLでは30%、HLでは20%

課題の性質

個人口述では、次のプロンプトを投げかけます。

自分で選んだグローバルな問題が、学習した2つの作品の内容と形式を通してどのように表現されているか分析しなさい。

課題の説明

個人口述は学習者ポートフォリオで生徒が行ってきた研究に基づくものです。この探究の過程で、一連の作品と多くのグローバルな問題について学びます。個人口述に取り組む段階で、課題の中で探究するグローバルな問題および作品を決定しなければなりません。作品は2つ選ぶ必要があります。1つは「言語A」で学習している言語で書かれた原書であり、もう1つは翻訳作品でなければなりません。それぞれの作品から、グローバルな問題の存在を表す40行以内の抜粋を選択します。抜粋が、行数によって分量を表すことが適切ではない形式の場合、時間内に深みのある議論ができるだけの分量のテキストを使用してください。

作品と抜粋の選択

選択した作品は、グローバルな問題と明らかな関連性がなければなりません。個人口述は、作品がグローバルな問題を表現し探究する方法について、十分に裏づけされた議論を展開するものです。生徒は2つの作品から1つずつ、計2つの抜粋を選択します。抜粋はグローバルな問題に焦点があてられた場面を明確に示すものでなければなりません。抜粋は通常40行以内とし、扱えるだけの分量を分析の素材に選んでください。生徒は、注釈や書き込みなどのない抜粋を議論を支える材料として個人口述に持ち込みます。そのため、抜粋が長すぎてしまうと、作品全体を効果的に論じることが難しくなります。もちろん、抜粋ではなく、ひとつの作品（詩一篇など）を選択してもかまいません。

長い学習作品の一部である文学テキスト（短編小説など）から抜粋を選択した場合や、学習作品から完結したテキスト（詩など）を抜粋した場合、個人口述の中で、広範な作品全体に関連する点について議論がなされるべきです。

抜粋の目的は、生徒が口述に集中できるようにし、引用を暗記する必要を無くし、より詳細な問題、例えばグローバルな問題を提示するために作者が用いたスタイル、特定のツール、その他の技法を探究できるようにすることです。抜粋は、その抜粋と作品全体との

関連性への生徒の理解を示し、グローバルな問題に関する観点を形づくるために作者が選んだ大小の選択肢について触れることができるよう、選択するべきです。

グローバルな問題を決定する

グローバルな問題は、次の3つの特徴を備えています。

- ・ 広範な規模で重要性をもつ
- ・ 国境をこえて存在する
- ・ 地域の日々の生活に影響を及ぼす

口述の焦点となるグローバルな問題を決定するための手引きとして、次の探究領域から1つ以上の領域を検討することができます。ただし、これらのトピックがすべてというわけではなく、生徒がアイデアを考案し、個人口述の基礎となる特定のグローバルな問題につなげるきっかけとなるものです。また、領域間に大幅な重複がある可能性があることに留意してください。

文化、アイデンティティー、コミュニティ

作品が家族、階級、人種、民族、国籍、宗教、ジェンダーとセクシュアリティの観点をいかに探究しているか、そしてこれらが個人と社会に与える影響に焦点をあてる。また、移民、植民地主義、ナショナリズムにまつわる問題に焦点をあてる。

信念、価値観、教育

作品が特定の社会で培われた信念や価値観をいかに探究しているか、またそれらが個人、コミュニティ、教育システムをいかに形づくるかという点に焦点をあてる。信念や価値観、倫理観が衝突した時に生まれる緊張状態についても探究する。

政治、権力、正義

作品が権利と責任、政府や組織の機能や構造という観点をいかに探究しているかという点に焦点をあてる。権力のヒエラルキー、富と資源の分配、正義と法の限界、平等と不平等、人権、平和と紛争についても研究する。

芸術、創造性、想像力

作品が美的インスピレーション、創造、工夫、美という観点をいかに探究しているかという点に焦点をあてる。また、芸術を通じた認識の形成や問いかけ、社会における芸術の機能、価値、効果についても焦点をあてる。

科学、テクノロジー、環境

人間と環境の関係性について、またテクノロジーとメディアが社会にもたらす影響について、作品がどのように探究しているかという点に焦点をあてる。科学の発展や進歩という考え方についても考察する。

口述のためのグローバルな問題を選ぶにあたり、生徒は上記のさまざまな探究領域からただ選ぶだけではなく（探究領域はあまりに広範囲です）、10分間の口述で展開するにふさわしい議論のトピックを決定する必要があります。グローバルな問題として考えられる問題は、広範な規模で重要性をもち、国境をこえて存在するものであり、地域の日々の生活に影響を及ぼしているものでなければなりません。また、グローバルな問題が選択した抜粋や作品の中で明確に示されていなければなりません。

例えば「文化、アイデンティティー、コミュニティ」の分野において、「ジェンダー」というテーマはあまりにも範囲が広く、個人口述には適切ではないかもしれません。その代わり、このテーマに関心のある生徒は、性別ごとの偏見が複数の異なる文脈においてどのように現れるか、この偏見がどのようにして多岐にわたる作品においてさまざまな方法で裏づけられるのか、作者の選択によって「性別ごとの偏見」の意味がどう表現されるか、この偏見は肯定的に捉えるべきか否定的に捉えるべきかについて探究し、作者の選択と、それがさまざまな読者や視聴者の理解にどう影響するかを評価することができます。

口述自体は、選択した2つの作品に関連のあるグローバルな問題の観点のみを扱います。口述では、バランスのとれたアプローチを用いて、両方の作品を同程度取り上げるようにします。したがって、議論に同等の重みをもつ素材を提供できる抜粋あるいは作品を選ぶことが大切です。

学習者ポートフォリオと個人口述

学習者ポートフォリオは特に評価の対象にはなりません、生徒がグローバルな問題について作品の探究と振り返りをする重要な場です。

個人口述の準備に関連して、学習者ポートフォリオは生徒に次のような機会をもたらします。

- ・ 今までに読んだそれぞれの作品に関するさまざまなグローバルな問題について記録する。
- ・ 取り扱われている共通のグローバルな問題に基づいて、異なる作品間に存在するつながりを探る。
- ・ 形式と内容を通して、学習した作品の鍵となる文章が、1つのグローバルな問題についてどのように類似した、あるいは異なる見解を示すかを探る。
- ・ グローバルな問題に関する思考と計画の発展、およびその文化的価値や定義、学習した作品への応用が探究を通してたどった変化の道筋を記録する。
- ・ 内部評価に取り組むにあたり、学習者として個人的に難しい部分について振り返る。

個人口述の実施

生徒は評価の直前まで学習に使われた中から作品を選ぶことができます。個人口述に選んだテキストは、他のいかなる評価課題にも使用することはできません。生徒は自分で口述のトピックを選択します。教師は、生徒がグローバルな問題の候補や関連した作品・テキストを選び、また抜粋を効果的に選ぶよう観察と指導を行います。生徒に対しトピックを提案したり、すべきことを指示したりしてはなりません。教師は準備にあたって生徒を支援するという重要な役割を担ってはいるものの、この口述は生徒が自ら考え作り上げる必要があります。

口述は、コースで学習する作品のうち過半数を学習した後であれば、いつ実施してもかまいません（例えば、HLでは13作品中7作品が終わった時点、SLでは9作品中5作品が終わった時点）。口述で使用されるすべての作品は、コース指導の一環として取り上げられる必要があります。口述は第1年次の最終段階か、第2年次の最初の時期に実施されるのが望ましいでしょう。

口述の場所と時間は教師が決めます。教師はすべての口述を1日で実施してもかまいませんし、数日かけて実施することもできます。口述の実施時期については、十分な余裕を持って生徒に通知しなければなりません。

生徒が口述のアウトラインを作成するために使う用紙が、学校に配布されます。生徒は事前にアウトラインを作成し、口述の際に活用することができます。ただし、このアウトラインを原稿として読み上げることはできません。この用紙には、要点を最大10点まで箇条書きで記入でき、口述の構成に役立てることができます。それぞれの要点は長くなりすぎないようにします。学校は、結果が出るまでアウトラインの用紙をすべて保存しておかなければなりません。生徒本人が取り組んだものであるかどうか判断するため、用紙をIBに提出するよう求められる場合があります。

教師は、個人口述の評価実施日の少なくとも1週間前までに、生徒が選んだ抜粋のコピーを集め承認します。また教師は評価の際には、手元に抜粋のコピーを用意し、ふさわしい質問ができるようにします。

抜粋は注意書きなど書き込みのないものでなければならず、生徒が個人口述の場に持ち込めるのは、抜粋とアウトラインのみです。

個人口述は生徒と教師の間で実施されます。教師は、抜粋やテキストに関する生徒の知識と理解、そして選んだグローバルな問題に関する作者の選択についての分析をさらに掘り下げるような質問をします。あまり自信のない生徒の場合は、裏づけのない主張や不十分な主張をさらに詳しく述べる機会を与えなければなりません。

個人口述は10分間で、そのあとに教師からの質問が5分間あります。

個人口述は内部評価し、外部でIBがモデレーションを行います。モデレーションには口述を録音したものおよび関連する抜粋が必要となります。このため、すべての資料と録音を間違いなく回収し保存しなければなりません。録音のため、静かな環境を提供できるように配慮してください。

内部評価規準

4つの評価規準があります。

規準 A	知識、理解、解釈	10 点
規準 B	分析と評価	10 点
規準 C	焦点と構成	10 点
規準 D	言語	10 点
合計		40 点

規準 A：知識、理解、解釈

- ・ 抜粋部分およびその出典である作品やテキストについての知識と理解をどの程度示しているか。

- ・ 抜粋部分および作品やテキストについての知識と理解をどの程度使用して、グローバルな問題に関する結論を引き出しているか。
- ・ 抜粋部分および作品やテキストを参照し、どの程度考えを裏づけているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1-2	グローバルな問題に関して、抜粋部分および作品やテキストについての知識と理解をほとんど示していない。 抜粋部分および作品やテキストの参照はほとんど見られない、またはほとんどが適切でない。
3-4	グローバルな問題に関して、抜粋部分および作品やテキストについての知識と理解をある程度示している。 抜粋部分および作品やテキストの参照は時おり適切である。
5-6	グローバルな問題に関して、抜粋部分および作品やテキストについての十分な知識と理解を示し、含意される意味についての解釈を示している。 抜粋部分および作品やテキストの参照はおおむね関連性があり、ほとんどが生徒の考えを裏づけている。
7-8	グローバルな問題に関して、抜粋部分および作品やテキストについての優れた知識と理解を示し、含意される意味についての継続的な解釈を示している。 抜粋部分および作品やテキストの参照は関連性があり、生徒の考えを裏づけている。
9-10	グローバルな問題に関して、抜粋部分および作品やテキストについての非常に優れた知識と理解を示し、含意される意味についての説得力のある解釈を示している。 抜粋部分および作品やテキストの参照は巧みに選択されており、生徒の考えを効果的に裏づけている。

規準 B：分析と評価

- ・ グローバルな問題を提示するうえで作者がとった選択について、抜粋部分とその出典である作品やテキストについての自分の知識および理解をどの程度使用し、分析および評価を行っているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1-2	説明的な口述になっている。または、関連性のある分析を行っていない。 作者がとった選択をほとんど特定しておらず、特定しているとしても、グローバルな問題の提示方法との関係についての理解が乏しい。

配点	レベルの説明
3-4	<p>関連性のある分析をいくらか行っているが、それらは説明的な記述に基づいたものである。</p> <p>作者がとった選択を特定しているが、グローバルな問題の提示方法との関係についての言及が曖昧だったり、部分的にしか理解できていない。</p>
5-6	<p>全体的に分析に基づく口述になっており、抜粋部分とその出典の作品やテキストの評価は大部分において関連性がある。</p> <p>作者がとった選択を特定し、その選択がグローバルな問題を提示していることを適度に理解している。</p>
7-8	<p>抜粋部分とその出典の作品やテキストの分析および評価は関連性があり、時おり洞察力を示している。</p> <p>作者がとった選択がグローバルな問題を提示するうえでどのように使われているかをよく理解している。</p>
9-10	<p>抜粋部分とその出典の作品やテキストの分析および評価は関連性があり、洞察力を示している。</p> <p>作者がとった選択がグローバルな問題を提示するうえでどのように使われているかを、完全に、かつ微妙なニュアンスまで理解している。</p>

規準 C：焦点と構成

- ・ 口述はどの程度構成が考慮され、バランスがとれ、また焦点を絞れているか。
- ・ 考えをどの程度一貫性のある方法で結びつけているか。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1-2	課題にほとんど焦点を絞れていない。考えと考えのつながりがほとんど存在しない。
3-4	<p>課題に時おり焦点を絞れている。抜粋部分およびその出典である作品やテキストの取り上げ方はバランスがとれていない場合がある。</p> <p>考えの間のつながりはいくらか存在するが、必ずしも一貫性があるとはいえない。</p>
5-6	<p>口述の内容は課題への焦点を保っているが、ところどころに欠けている部分がある。抜粋部分およびその出典である作品やテキストの取り上げ方は大部分においてバランスがとれている。</p> <p>考えを発展させる過程はほぼ論理的である。全体的に一貫性のある方法で考えを結びつけている。</p>

配点	レベルの説明
7-8	<p>口述の内容は課題への焦点を大部分において明確に持続させている。抜粋部分およびその出典である作品やテキストの取り上げ方はバランスがとれている。</p> <p>考えを発展させる過程に一貫性があり論理的である。一貫性のある方法で効果的に考えを結びつけている。</p>
9-10	<p>口述の内容は課題への焦点を明確に持続させている。抜粋部分およびその出典である作品やテキストの取り上げ方はバランスがうまくとれている。</p> <p>考えを発展させる過程は論理的で、説得力がある。説得力のある方法で考えを結びつけている。</p>

規準 D：言語

- ・ 言葉遣いがどの程度明確、正確、かつ効果的か。

配点	レベルの説明
0	この成果物は以下に記す基準に達していない。
1-2	<p>言葉遣いが明確かつ正確であることはほとんどない。誤りがあり、コミュニケーションに支障があることが多い。語彙と構文は不明確で、不正確な部分が随所にある。</p> <p>スタイルの要素（言語使用域、語調、修辭的な技法など）は課題に不適切で、口述の質を落としている。</p>
3-4	<p>言葉遣いはおおむね明確である。誤りがあり、時おりコミュニケーションに支障がある。語彙と構文が不明確なことが多く、不正確な部分がある。</p> <p>スタイルの要素（言語使用域、語調、修辭的な技法など）は、課題に不適切なことが多く、口述の質を落としている。</p>
5-6	<p>言葉遣いは明確である。誤りはあるがコミュニケーションに支障が出ることはない。語彙と構文は課題に適切だが、単純で繰り返が多い。</p> <p>スタイルの要素（言語使用域、語調、修辭的な技法など）は課題に適切で、口述の質を落としてもいないが高めてもいない。</p>
7-8	<p>言葉遣いは明確かつ正確である。時おり誤りはあるが、コミュニケーションに支障が出ることはない。語彙と構文の使用は適切で幅広い。</p> <p>スタイルの要素（言語使用域、語調、修辭的な技法など）は課題に適切で、口述の質をいくらか高めている。</p>
9-10	<p>言葉遣いは明確、正確、かつ幅広い。時おりの誤りはあるが、コミュニケーションに支障が出ることはない。語彙と構文の使用は幅広く、効果を生み出している。</p>

配点	レベルの説明
	スタイルの要素（言語使用域、語調、修辭的な技法など）は課題に適切で、口述の質を高めている。

「言語と文学」における「指導のアプローチ」とATL

言語コースにおけるATLを通して、生徒はすべての領域における関連スキルを伸ばし、「学習の仕方を学ぶ」ことができます。教師はさまざまな「指導のアプローチ」を取り入れることで、ATLを指導することができます。生徒のATLは実践をへて改善し、段階的に向上していきます。

ATLは生徒がどのように学んでいるかを振り返り、明確にするための共通の枠組みとなります。これにより生徒は、効果的な学習と、卒業後の人生での成功に向けた土台を作ることができます。このため言語の学習は、「IBの学習者像」とIBの教育プログラムの基礎となる教育方針（批判的および創造的に考えるスキルの活用、学習方法を学ぶこと、国際的な視野の養成）にならなければならないべきです。

教師は、コースのデザインに「指導のアプローチ」を取り入れることで、「言語と文学」のコースにおいて生徒が学習スキルを特定し伸ばしていく手助けをします。

「指導のアプローチ」

探究を基盤とした指導

すべてのIBプログラムの基礎となる教育原理のひとつは、探究を基盤とした指導です。「探究する人」であることは「IBの学習者像」の特質であり、探究のプロセスでは生来の好奇心を高め、生涯にわたって自律的な学習者となるために必要なスキルを身につけます。探究を基盤とした指導の最も重要な側面は、生徒が積極的に自身の学習に取り組み、自らの知識を形成していくところにあります。

「言語と文学」の指導と学習は単に内容の伝達と理解ではありません。理解、分析、解釈、そして文脈化の過程に向き合うことも意味しています。このように、探究は「言語と文学」における授業の設計と実施の基盤となります。生徒は好奇心を発揮し、テキストへの自分なりの入り口を見つけ、それまでの学習との接点を見つけます。

「言語と文学」における、探究に基づく指導のアプローチと活動の例

- ・ さまざまな課題を作成し選択する時に、生徒の選択肢や探究の道筋に範囲を与え、動機づけする
- ・ 生徒が創作的な課題（筆記、口述、視覚的芸術）、模倣作（パステーション）、ロールプレイ、パフォーマンスなどに関わり、創作的執筆の過程や表現することの難しさを体験し探るよう動機づけする
- ・ 生徒の疑問や関心のある領域をもとに、個人・グループ研究課題、ケーススタディ、発表課題を設計する
- ・ 他の分野の探究（例えば歴史的、哲学的、心理学的な分野）が読書経験にどのように寄与し、その効果を深めるかを探る

- ・ テキストに対して問題解決のアプローチを用いる（例えばテキスト間のつながりを見つめる、異なる批判的観点をテキストに適用する）。

概念理解に重点を置いた指導

概念とは、教科の中で、また複数の教科にまたがって関連性をもつ、広範で力強く、アイデアを体系化する考え方です。概念の探究は、生徒が複雑なアイデアと向き合う能力を構築する助けとなり、トピックの背後にある「大きな概念」について議論することで、特定の事柄を学ぶ理由の核心に迫ることができます。また、概念を通じた指導と、生徒を高次の思考へと導くことの間には、強い関連性があります。例えば、生徒は具体的な思考から抽象的な思考へと移行し、知識を新しい文脈に適用することができるようになります。

「言語と文学」の中で、アイデンティティ、文化、創造性、コミュニケーション、表現、変換、観点はコースの中核をなすものです。これらの主要概念は、指導と学習が常に立ち戻る場所であり、コースで扱われるものから社会に存在するものまで、多様なテキストや問題に対する生徒の理解を助け、コース全体にまたがる理論的道筋を形成するものです。教師が、コースで扱われるさまざまなテキストや問題に対し、その学習によって広範な概念への理解をどう深めていくかという観点からアプローチすることで、生徒の学びはより意義深いものになります。これはテキストが直接関心を引くものではないという意味ではありません。特に、作者が言語や形式を使って文化的アイデンティティと価値観、関係、そして問題に焦点をあてたり、時には批判したりするやり方に関して、慎重で批判的な思考を必要としないという意味でもありません。しかし、社会のみならず「言語と文学」の学習領域との関係において、より広義で重要な現象が特定のテキストや問題の基礎となっていることは事実です。私たちはこのような理念をもって、批判的思考を培いながら、相互に関連し、応用が効く、より深い学習を実現していくのです。

「言語と文化」における、概念に重点を置いた指導のアプローチと活動の例

- ・ 実例から抽象へ移行する。例えば、個別のテキストを丁寧に読み知識を集めることでより広い概念的問いについて探究する（詩の特性、アイデアが「文学的」であることの意味の構築あるいはその重要性など）
- ・ 文学テキストの世界における多様なフォーマル表現や分布について探究するよう動機づける（例えば、文学形式、フォーマット、目的、読者、文脈など）
- ・ テキストに概念的枠組みを適用する、あるいは逆にテキストを読み概念的枠組みを構築する
- ・ テキストをさまざまな方法で変換（例えば映画化やパフォーマンスなど）し、文学形式やその決まり事について考察する活動を設計することで、変換の概念を探る
- ・ 広い概念的議論に基づいてテキストの詳細な研究を行う（例えば、表現の概念に関連して、物語の構成は意味に影響するか、など）伝達の方法がどのように意味に影響するか身体的行為（本、パフォーマンス、スピーチ）とコミュニケーションの関係性はどうか

地域的な文脈とグローバルな文脈において展開される指導

地域とグローバルなコミュニティーの一員として、生徒は自分の生活体験やまわりのコミュニティーや社会という視点を通して世の中を理解していきます。文脈に基づいた指導と学習により、生徒は自分の置かれた状況と他者の状況を往来できるため、アイデア間のつながりを発見し、国際的な視野を養います。

文脈の考え方は、「言語と文学」においてさまざまな意味で重要となります。読者、目的、文学形式は、テキストと、そのテキストが創作され消費される文脈をつなげるうえで大切な役割を担っており、生徒が言語学的、文学的知識を現実の世界に適用する方法を見つける手助けをします。「言語と文学」のクラスは、自分にとってなじみがあることとそうでないことを理解し、また地域とグローバルな文化的文脈について、テキスト自体の内容やそれらが読まれ解釈される方法を通して理解を深める理想的な場でもあります。

「言語と文学」における、文脈に基づく指導のアプローチと活動の例

- ・ 外の世界を学校に持ち込む（作家、文化の専門家、他の教師、演劇公演、学校の提携など）
- ・ 生徒の背景、経験、関心を引き出し、さまざまな文化からのテキストを取り混ぜる
- ・ 文化的文脈を探究し、芸術など他の科目へのつながりを生み出せるような、創造的で現実的な機会をもつことを奨励する（例えば、地域の劇団用にプログラムノートを書く、芸術作品やモノログ、コラージュ、詩の創作など）
- ・ 体験学習の機会を提供することで、生徒を外の世界に連れ出す（例えば、CAS と科目を明確に結びつけることで生徒が「言語と文学」に関連した CAS のプロジェクトを考案したり、経験したりできるようにする）
- ・ テキストや問題を理解するための文化的枠組みを提供する（ニュース記事や他の文化からの作品といった言語的な文脈など）

効果的なチームワークと協働に重点を置いた指導

協働は DP における学習の鍵となる要素です。学習は、共有的認知、状況的認知、埋め込まれた認知のアプローチと密接に関わる社会現象であり、特定の文脈における知性の複雑な交わりの産物であるとされています。協働学習は生徒同士の間で起こるものですが、意味を構築する過程で生徒と教師の間でも起こります。

言語の使用は人との交流に関連していることから、協働は「言語と文学」において特に重要です。さらに、私たちがテキストをどう受け入れるかは、私たちが属する読者のコミュニティーによって変わります。テキストの意味を見つけ出すという作業は、協働の過程です。1人でテキストを読んでいる場合でも、過去に読んだものや、これまでの他者との経験から影響を受けます。マイケル・オンダーチェは「家族を駆け抜けて」（2009）の中で、「文学作品は協働作業である」と指摘しています。

「言語と文学」における協働学習活動の例

- ・ 同一のテキストの異なる解釈をめぐる、生徒同士の話し合いと意見のすり合わせを促すような活動を設計する

- ・ ディスカッションの構築を助け、教からの自立と、生徒の相互協力を支えるような特定の実施要項（リテラチャーサークルの実施要項など）を使用する
- ・ 相互評価（ピアアセスメント）を導入し、生徒が自分の理解についてクラスメートからフィードバックを得られるようにする
- ・ 本資料においてIBが設定した枠を逸脱することなく、シラバスの内容、評価、教材の順序などの決定について生徒が集団としてより大きな発言力をもてるようにする
- ・ さまざまな意思決定や課題、パフォーマンス要素が盛り込まれたグループ発表やパフォーマンスを行う機会を設ける

学習の障壁を取り除くように考えられた指導

差異化（ディファレンシエーション）とは生徒のさまざまな学習方法を支援することであり、多様なニーズをもつ生徒がそれぞれ異なる学習目的を果たすことができるように、学習経験を構築することです。したがって、差異化と、効果的で目的に沿った計画の間には重要な関連性があります。

「言語と文学」を計画する教師は、アイデンティティを確認し、自己肯定感を確立し、既にもっている知識を大切にし、足場づくり（スキップフォールディング）をし、学習を進展させる授業や活動を作り上げていきます。テキストの選択からクラスにおける活動の内容まで、広範囲のさまざまな決断によって、個々の生徒のニーズが満たされる度合いが大きく変わります。

「言語と文学」における学習の障壁を取り除く指導の例

- ・ 難易度は高いが理解しやすいテキストを選び、既にもっている知識を活用できるようにする
- ・ 多様な学習ニーズに対応するためさまざまな活動を計画し、同じ目的を達成するために異なる形態の課題を準備し、生徒が自ら選択できるようにする
- ・ 協働と成長をうながすクラス内でのグループ分けができるように、さまざまな方法を取り入れる
- ・ マルチモーダルなテキストに注目し、読み上げられたテキスト（オーディオブックなど）を入手したり、ビジュアルに焦点をあてたテキストのグラフィックな解釈に取り組むことができるようにする
- ・ 個々の学習者のそれぞれ異なるニーズに特化した関連性のあるフィードバックを、適切なタイミングで与える
- ・ カリキュラムに関して生徒が意見を出すことができるように考慮する（例えば、取り組む作品を選択するにあたり生徒の意見を聞く）

評価（形成的評価と総括的評価）を取り入れた指導

評価は、学習を支え、また到達度を測定する重要な役割を果たします。DPでは、正式かつ、規準に基づいた総括的評価を用いて全体的な学習が評価されますが、シラバスに沿った指導を実施する中で、さまざまなタイミングで他の評価（形成的評価と総括的評価の両方）を活用して学習レベルを確認し、今後のアプローチや活動について決定を下していく

ことが求められます。形成的評価と総括的評価、それらに対する適切なフィードバックは生徒の学習を改善する効果的なツールとなります。

「言語と文学」において、多くの場合、評価は成果物だけでなくその過程も重視します。例えば、学習者ポートフォリオで行う作業の目的は、取り組んだテキストの理解、テキスト間のつながり、テキストへの応答を形成する文化的価値観、複数の読者がもつ文化を超えたものの見方、コースを構成する概念や探究領域に関して、生徒が私的な自己評価を継続的に実施できるようにすることです。

評価は教師が主導することがほとんどですが、正式な自己評価やクラスメートとの相互評価を計画することもできます。これにより生徒は、自分や他の生徒の学習とパフォーマンスを振り返ることができ、言語と文学のスキルの向上につながります。得られたデータをその後の指導に活用できることが評価の重要な点です。評価やフィードバックが生徒にとってだけでなく教師にとっても大切なのはこのためです。

「言語と文学」における評価に基づいた指導の例

- ・ 評点とそれに対するコメントを生徒が理解しているか確認し、必要に応じて再確認や追加の活動を実施する
- ・ 生徒のフィードバックや前回の応答を基にディスカッションを行う
- ・ さまざまな方法による継続的な振り返りと自己評価を生徒自身に行わせ（ブレインストーミング、フリーライティング、ジャーナルでの応答、批判的振り返りなど）、時間をかけて学習の足場づくりをする
- ・ 生徒が互いの解釈についてすり合わせを行い、解釈の元となった文化的価値観について探究できるよう、オンラインの協働フォーラムでさまざまなトピックのディスカッションを行う
- ・ 内部評価や外部評価から得られたデータに基づき、特定の指導に焦点を絞ったミニレッスンまたはワークショップを実施する

学習のアプローチ (ATL)

思考スキル

思考スキルの育成は、すべてのIBプログラムに大きな影響を与える構成主義的アプローチの重要な特色です。IBのクラスで指導する教師は、生徒がメタ認知、振り返り、批判的思考、創造的思考と応用のスキルを培うための学習の機会を与え形成するファシリテーターです。暗記や説明のみではなく質問に対する答えを自ら考え出すよう生徒に働きかけることによって、熟考することがクラス内で育まれます。

「言語と文学」において生徒は、本質的な教科の問題と向き合います。3つのコースは、テキストを読み、聞き、見ること、テキストへの根拠のある創造的な応答の形成、および、それを他者に伝えるという作業に基づき構築されています。これらすべての活動を通して、広範で洗練された思考スキルが養われます。

「言語と文学」において思考スキルを発達させる例

- ・ 学習したテキストと時事問題との関連性を見いだすことで、学習したことを新たな文脈に応用しやすくする
- ・ テキストの意味と、その意味がどのように構築されるかについて、既存の解釈や簡単に手に入るオンラインの情報に頼るのではなく、自分なりの仮説を立てることを奨励する
- ・ 時代、文化、文学形式、テキストタイプが異なるテキストを取り交ぜて学習することにより思考を深める
- ・ 他者に頼ることなく自発的に考え意思決定をしなければならないロールプレイやディベートなどのアクティブラーニングの技法を活用する
- ・ 思考の可視化の手順を一貫して行うことにより、思考する文化をクラスの中にしっかりと根付かせる

コミュニケーションスキル

コミュニケーションスキルは、学業において重要なだけでなく、学習コミュニティの中で心地よい雰囲気を作り出すためにもきわめて重要です。コミュニケーションスキルによって、生徒同士および生徒と大人の良好な人間関係が形成・維持されます。さらに、良好なコミュニケーションが図れることは生徒の自信につながり、将来の可能性を押し広げます。

言うまでもなく、コミュニケーションスキルは「言語と文学」の中核をなすものです。読む、見る、書く、話す、聞く、パフォーマンスなどのコミュニケーションの具体的な要素が、コースの目的の一部を形成します。「言語と文学」のほとんどすべての側面が、生徒のコミュニケーションスキルの発達に関連しています。

「言語と文学」においてコミュニケーション能力が培われる方法の例

- ・ テキストに対して、よく構成されしっかりとした根拠のある個人的な応答をする
- ・ 多様なプレゼンテーション形式を取り入れたグループ発表や個人発表を実施し、聞き手の積極的な参加と、発表者と聞き手の活発なやりとりを促す
- ・ デジタルツールを活用し、学習を深め、クラス内の学習環境におけるコミュニケーションやフィードバックを活発にする
- ・ ロールプレイや振り返りを用いてさまざまな役割を練習したり、演劇やスキット、文学の口述解釈などを聞き手となるクラスメートの前で披露する
- ・ 生徒主導の文学集会、保護者へのプレゼンテーション、学内の後輩や他の学校のコミュニティなどとの活動を通して、クラス外の学問的コミュニケーションの輪を広げる

社会性スキル

社会性スキルは、学習者の全人的な成長に関わり、学習コミュニティにおける価値観を支えるものであるという点で、コミュニケーションスキルと密接に関係しています。内向的か外向的かの度合いは人によって大きく異なり、これらの差異は尊重されるべきだという事実を認識することが生徒の社会性スキルを向上させる出発点となります。同様に、

社会的状況において期待される適切な行動は、文化によって異なります。他者の視点を理解し、良好な人間関係を築き、自分の言動が他者に及ぼす影響を認識できることは、「IBの学習者像」の多くの資質、および国際的な視野をもった生徒を育むという目標の根幹を成しています。

「言語と文学」では、広い範囲のテキストに関する慎重で相互的、協働的なディスカッションに参加し、テキストの意味について討論・交渉することによって、生徒は自身の社会性スキルを考察し発展させることができます。これは、同一のテキストに対して、同じクラス内で異なる解釈が発生することがあるからです。自分の解釈と異なる、あるいは対立する解釈と直面した時、生徒はそのような意見をもつ他の生徒の話に注意深く耳を傾け、自身の意見の根拠を示し、協働的に同意に至るか、それが不可能な場合は、2つ以上の見解の違いを明確に理解し、それぞれの見解を支持するエビデンスを特定する必要があります。

「言語と文学」において社会性スキルを伸ばす例

- ・ 教室とディスカッションにおける決まりを定める
- ・ 教師自らが態度や例を示すことで、互いを尊重しながら難しいテキストや多様なテキストを安心して学習できるクラス環境を作り出す
- ・ クラス内の活発な議論と個人的な振り返りの両方を効果的に実現できるよう、グループ回答と個人回答、グループ作業と個人作業、教室のスペースをバランスの取れた方法で目的をもって活用する
- ・ 生徒が自分とは異なる視点を検討し、そのような視点をもった生徒と意味について協働的な意見のすり合わせができるように、傾聴する力をつける
- ・ テキストに対するさまざまな応答や、違いを認め尊重するオープンなフィードバックの手本を教師が見せる

自己管理スキル

IBの生徒は、根気強い人間になることを学ぶ必要があります。自己管理の方法を学ぶことは、どんな学問プログラムにおいても重要であり、将来のための能力という意味でも大切です。

整理能力や目標設定、時間の管理などの自己管理スキル、また感情のコントロール、動機づけ、根気強さなどの感情スキルは「言語と文学」において、特に長編作品や難易度の高いテキスト、自主研究に取り組むときに大切になります。生徒は自立的な学習を可能にする自主性、忍耐強さ、強い意志を示す必要があります。生徒はまた、シラバスの中で与えられた個別選択の機会をすすんで活用するべきです。

「言語と文学」において自己管理スキルが育成される例

- ・ 明確な期限を決め、期待値を公平に、目的をもった方法で管理する
- ・ 成長を支え、時間管理を可能にし、真の意味での振り返りを妨げるような意図的な障壁、問題、期待などを与えることのない作業計画や学習計画を立てる

- ・ ノートの取り方やマーキングの入れ方、さまざまな整理用デジタルツールの使用などの学習テクニックに着目すると共に、生徒が自己管理や学問的整理能力について自分なりのアプローチを身につけられるようにする
- ・ 規準に対する進捗状態を自己評価できるよう促し、言語と文学への関心や楽しみを見つけてというような広い範囲の目的に対しても自己の振り返りをするように促す
- ・ 生徒が自律性を伸ばし、自分の作品のまとめ方に責任をもてるように手助けをし、そのプロセスにおいて、期限があるために生じるチャレンジに意識を向けさせる

リサーチスキル

優れたリサーチスキルは、従来から学問の探究において中心的な役割を担っていましたが、デジタル形式の資料が利用しやすくなり、生徒がアクセスできる情報量が爆発的に増えていることを受けて、リサーチスキルを発達させることは、今日の教育にとってとりわけ重要な点となっています。デジタル資料を使いこなし、スキルを学問的に誠実な方法で運用することは、すべての IB プログラムにおける学習の重要な側面です。

焦点の絞られた興味深い研究の問いを設定する、情報源を吟味する、記録する、情報を評価し統合するなどの基礎的なリサーチスキルは、「言語と文学」において必須のスキルです。学習を通して、生徒は、リサーチスキルを気軽に練習したり、より正式に拡張された形で練習したりできる素晴らしい機会を数多く与えられます。コースでは多様な文脈から生まれたさまざまなテキストを扱うことから、取り組みや理解を深めるために、必然的にある程度のリサーチを必要とします。

「言語と文学」においてリサーチスキルが伸ばされる例

- ・ 教師が基礎的なインターネット検索を超えて慎重に選んだ二次的資料を使用し、効果的なリサーチスキルと明確な学問的誠実性の手本を示す
- ・ 確実な根拠をもち、しっかりとしたりサーチに基づくテキストの解釈とそうでないものを判別する能力や、テキストに対しそれぞれ異なる批判的観点から編み出された複数の主張の妥当性を評価する能力を身につけさせる
- ・ オンラインデータベースの活用方法や最も意味のある情報源を特定し選択する方法について教師の指導を受けながら、プレゼンテーション、論文、パフォーマンスのための個別リサーチを実施する
- ・ 学習したテキストの文脈の問題に関連し、グループでのリサーチ課題を作成する
- ・ 教師が設定した言語学、文学史、慣習のリサーチに取り組み、重要な学問的問い、適切なデータベース、利用可能な二次的テキスト素材、および信頼性の評価方法についての認識を高める

指示用語の解説

「言語と文学」の指示用語

生徒は、評価目標と評価規準で使用される次の重要な指示用語および表現に慣れておく必要があります。これらは、以下の定義に基づいて理解する必要があります。試験問題でも使用される用語がありますが、ほとんどはさまざまな評価規準の説明文で達成度を説明するのに使用されることが多い用語です。

指示用語	評価目標	定義
分析しなさい (Analyse)	2、3	本質的な要素または構造を明らかにするために分解しなさい。
コメントしなさい (Comment)	2、3	与えられた記述または計算結果に基づき、見解を述べなさい。
比較しなさい (Compare)	1、2、3	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
比較・対比しなさい (Compare and contrast)	1、2、3	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点および相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
対比しなさい (Contrast)	1、2、3	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
詳しく述べなさい (Describe)	1、3	詳細に述べなさい。
論じなさい (Discuss)	1、2、3	さまざまな議論、要因、仮説を考慮し、バランスよく批評しなさい。意見または結論は、適切なエビデンスを挙げて、はっきりと述べなさい。
評価しなさい (Evaluate)	2、3	長所と短所を比較し、価値を定めなさい。

指示用語	評価目標	定義
考察しなさい (Examine)	2、3	論点の前提や相互関係が明らかになるように、主張または概念について考えなさい。
説明しなさい (Explain)	1、2、3	理由や要因などを詳しく述べなさい。
探究しなさい (Explore)	2、3	何かを発見するための系統立ったプロセスに取り組みなさい。
解釈しなさい (Interpret)	1、3	知識と理解を用いて、与えられた情報から傾向をつかんで結論を導き出しなさい。
調べなさい (Investigate)	1、2	観察、調査、または詳細かつ体系的な検証を行い、事実を立証し新たな結論を導き出しなさい。
正当化しなさい (Justify)	1、2、3	答えや結論を裏づける妥当な理由やエビデンスを述べなさい。
発表しなさい (Present)	3	展示、観察、考察または熟慮のために提供しなさい。
どの程度 (To what extent)	1、2、3	主張または概念の長所または短所を検討しなさい。意見および結論ははっきりと提示し、適切なエビデンスおよび論理的に正しい論拠をもたせなさい。

参考文献

参考文献はカリキュラムレビューで参照した主な作品と、本資料に引用された作品の一覧です。この一覧はすべてを包括するものではなく、使用できるすべての文学作品を含むものではありません。教師への助言と手引きになるように意図的に選択されたものです。この参考文献一覧は、推奨する教科書の一覧ではありません。

Abbott, HP. 2002. *The Cambridge Introduction to Narrative*. Cambridge, UK. Cambridge University Press.

Appleman, D. 2009. *Critical Encounters in High School English: Teaching Literary Theory to Adolescents* (second edition). Urbana, IL, USA. National Council of Teachers of English (NCTE).

Beach, R and Myers, J. 2001. *Inquiry-based English Instruction: Engaging Students in Life and Literature*. New York, NY, USA. Teachers College Press.

Beaty, J and Hunter, JP (eds). 1998. *The Norton Introduction to Literature* (seventh edition). New York, NY, USA. WW Norton & Company.

Blau, SD. 2003. *The Literature Workshop: Teaching Texts and their Readers*. Portsmouth, NH, USA. Heinemann.

Choo, SS. 2013. *Reading the World, the Globe, and the Cosmos: Approaches to Teaching Literature for the Twenty-first Century*. New York, NY, USA. Peter Lang.

Choo, SS. 2014a. "Cultivating a Hospitable Imagination: Re-envisioning the World Literature Curriculum Through a Cosmopolitan Lens". *Curriculum Inquiry*. Vol 44, number 1. Pp 68-89.

Choo, SS. 2014b. "Towards a Cosmopolitan Vision of English Education in Singapore". *Discourse: Studies in the Cultural Politics of Education*. Vol 35, number 5. Pp 677-691. オンラインで入手可能 : <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/01596306.2014.921994>

Culler, J. 1981. *The Pursuit of Signs: Semiotics, Literature, Deconstruction*. Ithaca, NY, USA. Cornell University Press.

Culler, J. 2000. *Literary Theory: A Very Short Introduction*. Oxford, UK. Oxford University Press.

Damrosch, D. 2003. *What is World Literature?* Princeton, NJ, USA. Princeton University Press.

Damrosch, D. 2009a. "Frames for World Literature". In Winko, D, Jannidis, F and Lauer, G (eds). *Grenzen der Literatur Zu Begriff und Phänomen des Literarischen*. Berlin, Germany. Walter de Gruyter. Pp 496-515.

- Damrosch, D. 2009b. *How to Read World Literature*. Sussex, UK. Wiley-Blackwell.
- Damrosch, D (ed). 2009. *Teaching World Literature*. New York, NY, USA. Modern Language Association (MLA).
- Damrosch, D (ed). 2014. *World Literature in Theory*. Malden, MA, USA. Wiley-Blackwell.
- Damrosch, D and Spivak, G. 2 April 2011. "Comparative Literature/World Literature". Dialogue delivered orally at the American Comparative Literature Association Conference. Vancouver, Canada.
- Daniels, H and Steineke, N. 2004. *Mini-lessons for Literature Circles*. Portsmouth, NH, USA. Heinemann.
- Eagleton, T. 1996. *Literary Theory: An Introduction* (second edition). Minneapolis, MN, USA. The University of Minnesota Press.
- Eagleton, T. 2009. *Trouble with Strangers: A Study of Ethics*. Malden, MA, USA. Wiley-Blackwell.
- Erickson, HL, Lanning, LA, and French, R. 2017. *Concept-based Curriculum and Instruction for the Thinking Classroom* (second edition). Thousand Oaks, CA, USA. Corwin Press.
- Felski, R. 2008. *Uses of Literature*. Oxford, UK. Wiley-Blackwell.
- Fish, S. 1980. *Is There a Text in This Class?: The Authority of Interpretive Communities*. Cambridge, MA, USA. Harvard University Press.
- Friedman, SS. 1998. *Feminism and the Cultural Geographies of Encounter*. Princeton, NJ, USA. Princeton University Press.
- Hansen, DT. 2011. *The Teacher and the World: A Study of Cosmopolitanism as Education*. New York, NY, USA. Routledge.
- Kohn, A. 2000. *The Schools Our Children Deserve: Moving Beyond Traditional Classrooms and "Tougher Standards"*. Boston, MA, USA. Houghton Mifflin Harcourt.
- Kristeva, J. 1980. *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*. New York, NY, USA. Columbia University Press.
- Kristeva, J. 1986. "Word, Dialogue and Novel". In Moi, T (ed). *The Kristeva Reader*. New York, NY, USA. Columbia University Press. Pp 34-61.
- Leitch, VB (ed). 2001. *The Norton Anthology of Theory and Criticism*. New York, NY, USA. WW Norton & Company.
- Lodge, D. 1992. *The Art of Fiction*. London, UK. Penguin Books.
- McKeon, M (ed). 2000. *Theory of the Novel: A Historical Approach*. Baltimore, MD, USA. Johns Hopkins University Press.
- Ondaatje, M. 2009. *Running in the Family*. London, UK. Bloomsbury.
- Page, R and Thomas, B (eds). 2011. *New Narratives. Stories and Storytelling in the Digital Age*. Lincoln, NE, USA. University of Nebraska Press.

- Palumbo-Liu, D. 2012. *The Deliverance of Others: Reading Literature in a Global Age*. Durham, NC, USA. Duke University Press.
- Rimmon-Kenan, S. 2005. *Narrative Fiction: Contemporary Poetics* (second edition). London, UK. Routledge.
- Ritchhart, R, Church, M and Morrison, K. 2011. *Making Thinking Visible: How to Promote Engagement, Understanding, and Independence for All Learners*. San Francisco, CA, USA. Jossey-Bass.
- Rosenblatt, LM. 1994. *The Reader, the Text, the Poem: The Transactional Theory of the Literary Work*. Carbondale, IL, USA. Southern Illinois University Press.
- Rosenblatt, LM. 1995. *Literature as Exploration* (fifth edition). New York, NY, USA. Modern Language Association (MLA).
- Said, EW. 1983. *The World, the Text and the Critic*. Cambridge, MA, USA. Harvard University Press.
- Scholes, R. 1985. *Textual Power: Literary Theory and the Teaching of English*. New Haven, CT, USA. Yale University Press.
- Tomlinson, CA. 2001. *How to Differentiate Instruction in Mixed-ability Classrooms* (second edition). Alexandria, VA, USA. Association for Supervision and Curriculum Development (ASCD).
- Tomlinson, CA. 2014. *The Differentiated Classroom: Responding to the Needs of All Learners* (second edition). Alexandria, VA, USA. Association for Supervision and Curriculum Development (ASCD).
- Tovani, Cris. 2002. *I Read it but I don't get it: Comprehension Strategies for Adolescent Readers*. Portland, OR, USA. Stenhouse Publishers.
- Tyson, L. 2015. *Critical Theory Today: A User-friendly Guide* (third edition). New York, NY, USA. Routledge.
- Youssef, L. 2010. "A Matter of Relevance: Teaching Classics in the 21st Century". *College Teaching*. Vol 58, number 1. Pp 28-31.
- Wilhelm, Jeffrey D and Smith, Michael W. 2002. *"Reading don't fix no Chevys" Literacy in the Lives of Young Men*. Portsmouth, NH, USA, Heinemann.
- Zunshine, L. 2006. *Why We Read Fiction: Theory of Mind and the Novel*. Columbus, OH, USA. Ohio State University Press.